

雅間錄

六

昭和貳年八月中浣起筆

特別
14
1919
395



雅淵保六 昭和二年八月十五の起書
 の高田半峰博士の自叙傳の終るま何う一
 文を空のせしむと需めんとあらずとを考さ
 つく

此の一篇は半峰博士の自叙傳である一代記
 である。標題の昔の譯とあるが事あるの最近
 みまを道んびるる。興味本位のア子クドール
 に書いたともあるから博士の経歴の全部を
 細大漏らす書い収めてあるといふべきが重
 なる経歴の略を悉くしてある。
 全体半峰博士の自から書きたること、缺るの
 業無性で自叙傳をいし書く人びまへの博士



(筆 ホツゴ・ンアツ) 像肖の人主店商術美

原稿を校閲するに勿論活版校正も
みづからや、~~補注~~承知が本末まじい俵かると
いふ譯れから決して詠し放して母あとい葉
記者に放任しよと思つていささか
坪内君と私の此の自叙傳を勉めれば縁因から
補注を作ると云いん。て辭しかたもく。いろ
く書き加へた。そして私の補注が坪内君
のそれよりも多い譯は、博士の経歴と私の
経歴が多くなる場合一致してゐるかといふ
事。有体云々の坪内君の文章方面に關す
る事ではけんが例の態度でマレて筆を
つけろ。私もし同じ流儀で書かざるを
得ぬ。

補注がまばらで印刷面は、筆寫の觀を呈
する氣味もある。私つとめて書き添へた
小書其の效果あらうが、かゝる蛇足もある
であらうが、決して自家宣傳の爲めとい
ふのはいふ。
前より三よびるし、博士の経歴は、此物語に盡さ
てゐぬ。随分漏れてゐることもあるやうだし、
いふ事もある。言ひ足らぬこともあるやう
でもある。筆寫の坪内氏自身も一
歩進めれば、詠つてやらぬ處がいくらもあるといふ
ふふ位もある。兎角自家のこと、自家を言
ふ事があること、かゝるものがある。随つて一

歩といふ遺憾があるけれども、そこが自叙傳
に、日又難い事である、志がし志がのめり、
自分の功績をいふ自叙傳よりも寧ろ餘款
がある言書がある。博士が讀むの態度
での始終の談話殊に交友の性格送事
などを傳へようとする特し意を用ゐられ、
友人の私をばかりする、何人も流石
ると博士の人格もさうさうあるとあらう。
博士の傳は文藝傳よりも政治傳よりも
少く教育傳よりもあるが、政治の事か、
教育の事か、早稲田の
後りとさうである、今も博士の若かりし
時の追憶に今の若い人の照味をさすこ

博士

とかいふこと、殊に四五年、早稲田大子
に終始した経歴、早稲田大子の副傳者
に取つて大切、歴史にあるとある、さうする
一般教育家殊に教育の伝書家、取つて
指針とするべきものがある、さうあるある
方面に、博士が博士に就て伝評を試みる
の、此の篇の出版に、此の伝評の模範が
あるけれども、さういふ私をばかりする人も
ある、彼はさういふから、彼はさういふ
い。彼の補注の内、批評がまじしいこと
もあつて交つてあるが、成るだけ、辭けつて
りがある。實を云へば、私達の同窓殊に

概する此の自叙傳の版と云うを廿二出るの
最小時を得てあると思ふのである。

○まよ巳の日をトして并賦天の遷座式を行ふといつ
の頃まよ南復町に并賦天の祠ありて復井天と
いふに般の日印御命此の大興に此祠を合此
の地域よりありてむす女火の建物と極近しお此
るに同じ河老の一部敷地を罹る此の天祠の町内の
崇信する所ありて之をむす従業員中の男
出宗信するものあり、お捨て、も直き難く修
理を加へ、まの境内に池を掘り、樹木を植え

まよの風政を伝へて遷座の式を奉りけり
ころ、未だ社員従業員一同此の祠ありて
て、社員と合會の折、并賦天に就ていさくの延福
きる中、此の祠のまよをむす女火の建物の某
寺あり、春日向の真道、まよ心たてことか、崇
信し、まよのまよ、まよの副祠ともまよへまよこまよと
ら、實際復井天といふ能くあり、今も可なり
大なる能生息するをえりてまよのまよあり、今
社が創立の時此の祠の祭典を行ひしことあり、其時
より、復井天を見ん、波を田形に、まよの中
三隣の版あり、此日七祠あり、復井天の外部を
まよの版あり、配りてまよあり、此版を打出し

り。全体并賦天の谷に七福神の一に加く七
神中惟一の女神有り。是れかみこ因縁あり
一證として、此の女神を祀るの地は、湖
心の島目であること、不思議の池は、七世
の公園の赤羽池也。池心の并天は、身就
祀ることか出来ぬ。本来おの離れかたき神と
見くや、或は性慾崇拝の由来するものかと思
ふ。能ハ性慾をあらはすことと言ふも、
六北神を邸内へ祀る時の其の家の主人正妻を
迎ふ能はずとの傳説あり、西園寺公のこと
其故を以て正妻を迎へず、正妻を忌む女
神の嫉妬を因縁とするも、
榎も六性慾

に因縁あるの縁切の傳説あり、村木の榎有り、
婦女子の多し、
係あるかと思はる。今、充分考証をなすの材料
を缺けし、フト考ふるべきことを書きて、
是れは、
こと父火の火事、
を元のことと得る、
ふを得し、
の神、
一は、
八月十日日記



三
行

三
行

三
行

十二行

十二行

文曰
德本堂



文曰
藤樹院書

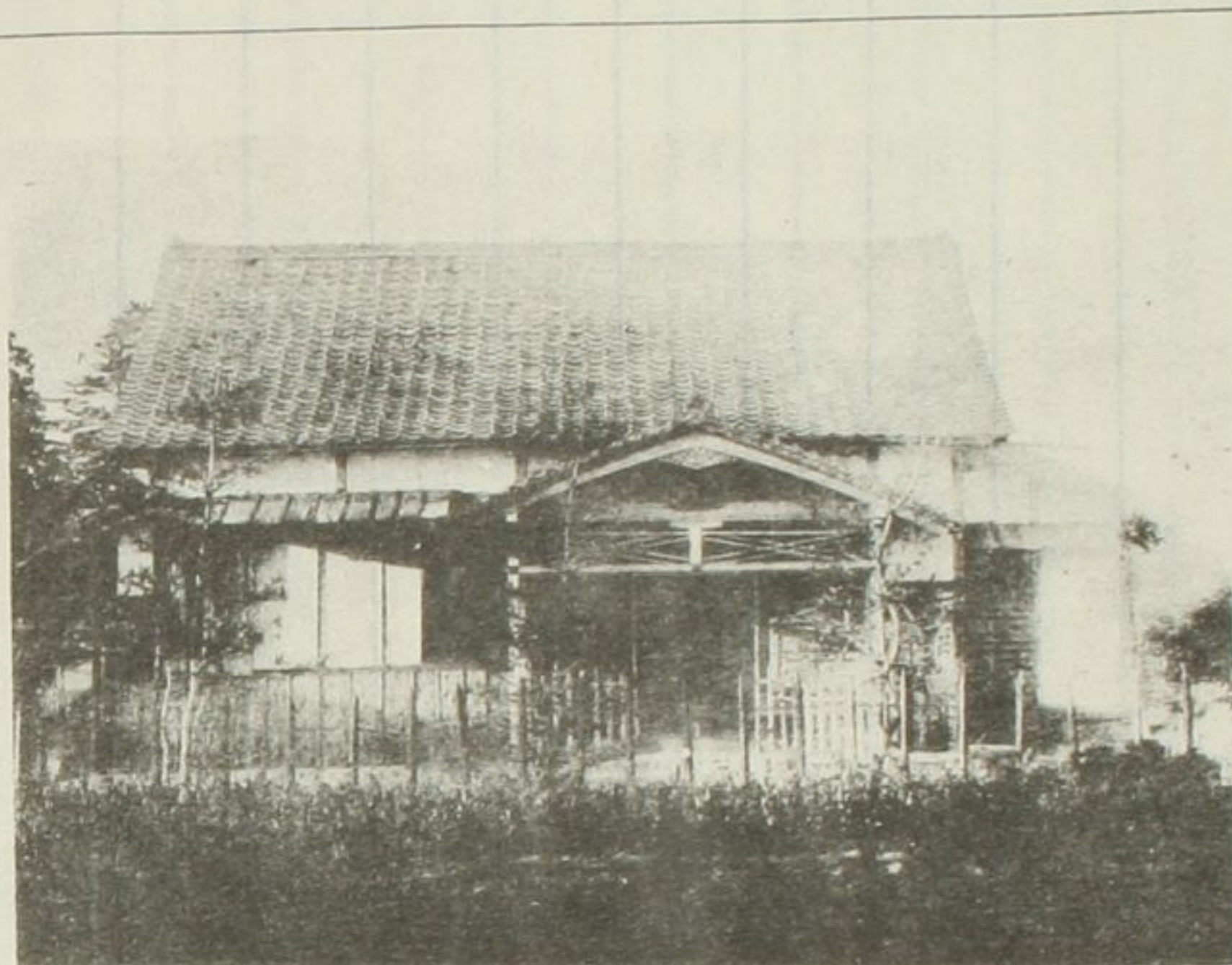


文曰
藤樹院書

書
藤
示

四二

十二行



書
藤
士

三九

十二行

(のもの 在現) 院書樹藤

○散策中者物屋の店頭に甚だ打候向書紙の表
 の目かともり、帳を開いて見るに巴里毛の布の表
 紙かつき、用紙はまの子の例の海苔なる者なり甚
 村得意の句が百餘ありてある、往々葦千海
 の書し入つてある、巻尾に「安永西の冬」の
 日人の書するもの甚だ打候とありて二顆の印が
 ある、原をへ句佛上人の所を打候とありて一
 かつた。從才禮の横帳に収めし得べき句書
 を天地に大紙白を存し、と教書に印刷し
 れり、味がある、大正十四年大改に出版し
 れり、味がある、句の流字もひ後とを成す
 か味を失ふと味がある、心者の白紙を打

讀ある紙にことあるの、俄々の無旋心も
 改の句意とおぼして、何と目味をそ、は
 ある、調かえ、翻書して四五分心の句を存
 する。

うぐいすの鼻ねがき、初音
 音、あゝおとさき、の音、こゝろ
 いかたの、いゝ意やあゝの、花、ころも
 美、隠の、枕さか、か、瓜、畑
 草の、香やあを、離、草、二寸
 若月や、夜いあ、住、又、宿の、茶、屋
 あ、あ、て、細、脛、高、き、あ、あ、山、子、丸
 三輪の、田、ん、勢、巾、着、着、る、る、あ、あ、あ、あ

らんばいのりせん花あり路の末
子を舞ふる敷さく無て枯屋
叶枯と狐の尻脚ありけり
狐の燃つく計り枯尾花
馬の尾こいはらのかゝる枯屋
茶の條とて石こ目の入る枯屋
古寺の窓あさきしき
こがらしや何れ世流る家五軒
麦まきや百とせける顔計り
二村に望る一軒冬木
歯あらくに葉の初を遙か
御座に似てるさよ古曆

貌見せやあをんとまきくる東山
世もあふ鼠の音の集とさ
秘人の目鼻もき行くひさし
稚子の寺るるかゝる銀杏
静ろく櫛の木原や冬の月
此外佳句多し前巻の巻打句集より
しんまのといしき合の者
○余の逸書春城六行は行の終後
を失しらん心憂行の終後を
の事と此月日の初をゆらと
房らえを出ししむら房らえ
行き居かさる

時の受けは既と一版おんときとよふ、僅に二通
ありて二千部存びあるといお、子上の意も也
●此年未廿九日に出、時、春城隨筆、二
通ありて、品切んとし、字をまよふとい、
ふい、そん、も優、一とのぬ成、蹟、ろ、ろとい、ぬ、
よの也

八月十七日記

○此の楠、款、日、年、事、ゆ、の、お、扇、の、物、も、を、
この詠しが、出、以、自、合、の、架、す、も、一、三、有、合、せ、の、扇、子
を、え、り、出、し、た、あ、ら、良、扇、の、丹、緑、の、繪、も、厚、好、的、の
あ、ら、味、が、あ、つ、て、よ、う、か、た、と、一、り、書、い、れ、よ、い、
あ、ら、の、に、今、の、印、刷、に、附、き、ん、て、物、味、が、薄、い、
也。京都の巻、あ、ら、一、か、が、配、一、條、が、版、下、と、心

つ、良、作、お、楽、の、圖、を、も、十、四、年、前、の、い、よ、め、の、
此、今、の、北、も、も、む、扇、子、の、形、も、か、り、り、繪、も、よ、
ろ、一、く、ま、い、る、を、え、ら、と、日、年、一、の、語、ろ、出、る、と、
ま、く、は、京、都、ま、な、月、者、と、い、ふ、家、が、扇、子、を、心
る、巧、め、を、う、つ、て、名、が、あ、ら、茶、人、好、の、扇、子
は、北、家、い、ろ、け、ん、ん、出、来、ぬ、と、い、ふ、は、茶、人、好、の
扇、は、女、房、う、ろ、う、と、い、ふ、と、別、く、い、て、ま、く、あ、つ、て、
近、も、百、端、の、あ、ら、一、の、特、徴、も、も、よ、へ、き、い、表、裏
を、同、し、繪、も、あ、ら、い、ま、い、る、と、い、ふ、ま、く、い、る、と、表、
裏、の、繪、も、一、改、し、て、御、意、狂、ひ、の、ま、い、の、ち、ま、け
ん、心、ま、い、り、御、意、を、ぬ、と、い、ふ、は、例、へ、い、鳥、の、
繪、を、表、の、あ、ら、い、す、と、い、ふ、は、例、へ、い、鳥、の、繪、

前期、在つたお由別高の延長びある傾城
官といふ職あり、武内重信が任仕居りて其
笑に後子するもあから錢十五貫文を年税と
して徴収するこころありければ、妻笑婦に對する
課税いこんか始まらうやあゝ。二年十月
○今より自由農業がたゞく凶徳にあり、そんたえき
原南町の端家、是木澤左衛門の抱へ侍香徳が
抱えまきこで、痴を病んぶるを衝つて、御をり
朝倉亮石見守の役所へたどりついたら、北よの息
の即ハ卿を拜し、尾にまきこといひ、既ハ地あり坂
を断つてあゝと、うか抱えまきを呼んで説く
たまひといと、あはりのゆ、梅主を呼んで見ると梅主

政

七あまの不同長き、もく実体ハ働らき年
期七一年、剩すの又、此からといつて、其意に任
すことし、て、まゝから、又、測、尾とまきこといひ、
尾とまき、動、成、い、言、ひ、換、し、此、地、人、か、い、あ、の、途、中、
者、及、し、た、と、や、ま、え、し、若、心、し、た、の、地、といふ、矢、
北、端、が、無、断、し、ま、家、を、通、ら、な、り、の、ゆ、か、
司、の、手、を、た、し、目、面、を、達、し、た、こ、と、か、ま、の、手、續、い、今、
の、自由、農、業、ソ、ウ、ク、リ、の、形、式、を、具、して、あ、る、の、い、
ぬ、が、あ、る、。

○嘉永二年六月、浦賀の御、星、船、の、あ、ら、い、ん、
折、新、吉、原、南、町、の、端、家、主、梅主、
い、ふ、が、朝、倉、石、見、守、の、為、め、と、あ、つ、て、敢、然、幕府、

とをせしむるは、女と考へれば結果として亦種族の
地の方を強かくしめしハ危殆にありとの方岐か
ら寧ろ教養深三珠に敬賦を施し以て關係
からあらわす供給の豊富と真樂の設備に
力を入んばおあすも、是れが皆文化をい
この基とすうれば、江戸も法西の地名を履
踏ししとゆる、商家の多いハ、その出費
も意味するに、此等の内なる其の富を
の安とを道ある来比よのちあらうし、まよ江
とハ、百貨集敷の地とすう、商家の中心とすうに
から、是れはまげんハ、大なる古利が出来まよ、か
来比よのちあらう、河のうらも、田舎米各地の

文化が江戸に移り、是れが集積し、是れが陶冶せん
是れが道化し、後の江戸文化、是れハ一花特毛
のある文化を醸し出した、よありある。各藩の流
炭を江戸に任ませ、れとすう、確かな江戸に連
田舎米、其の江戸と、辨振す、一政策がある、お
手あし、二、三、の、
法、炭、道、ハ、此、地、を、
彼、う、ら、も、大、武、業、は、小、火、火、千、は、と、い、ふ、あ
ひ、を、え、を、さ、う、ら、ら、自、分、の、藩、地、の、ハ、模、型、ハ、あ
か、の、や、う、な、を、え、く、任、重、し、て、終、る、各、藩、五、ひ、に、本
庭園の美を越ふこととすうれば、荒蕪の地ハ
田舎の地ハ容易に面目を改め、れ、ハ、大、害、災
前、ま、の、ち、地、も、市、街、を、瞰、視、す、と、大、き、を

あつても云へるものがある。料理は菓子など、飲食物も
街並み廊下の影や音を聴き楽しむこと、これらもまた
もろいお茶の盛んならうなことも亦勿論である
江戸のめ守居と唱ふるより一程の外交を
幕府の権威の如く終極心をゆるす必要から
種々の形式で交際し、これが為身多くの散財
もしたが、多量の文化を助けてゐる。旗本の子
弟が留學にあつても金ぶろく自刃内職
をやつて種々の工夫をやり、多量の文化の種
とらつてゐる。このも少くもさうらう。要す
は江戸の文化は一元から多量に、多量の文化は全
國の文化の料を吸納して、醸成してある。

この類も多量である。多量の陶器を、一程
江戸風味といふものがある。京都文化
と異つる所のある所、所以、西の公家、東の武家
と本位が異つてゐるから、勢ひ文化の質も
異つるべきである。唯、これこそ、日本風味は
外に風味が多量に交らうとしたのは、鎖國の政
策を取つたから、江戸風味は全く獨立した日
本風味といふことか、出来さう、維新の革命が
徳川氏が作つたものと、一時江戸は荒蕪の地、
河七牧七打こいせえん、田舎のよめが江戸祝ひを
征服し、こゝろ、突から家康入府、あつた。是れ
これこそ、維新後の文化の

特徴、度々智叡を世襲する由州國主義の爲め文化は、西洋に則つたの如く、大い

である。ソコで元締が小差を選抜するには、頗る奇抜な方法を用ゐたものだ。其の一例を擧ぐれば、久保町の元締「萬傳」が「箱根の三」と云ふ裸雲助を、一足飛に小差に引上げた話が面白い。元締はみな絹布ぐるみで、鈴が森の長兵衛もどきに輿につて道中する例であつたが、或る時萬傳が箱根山へ差しかると、前の宿で酒手のくれ方が少なくなつたといつて、「三」が追かけて来て、萬傳を輿から引すり出してなぐつた。小差ならばいざ知らず、雲助が元締をなぐると云ふは、容易な膽玉では出来ない事だから、萬傳はなぐられながら、情々と三の器量を見定めて、この野郎なら天晴小差が出来ると見込で、其の場で小差に引上げた。

果せるかなこの野郎、末には兩海道切ての小差となつて、一時非常に雄飛したが、働けるやつ程疵が多く、根が雲助であるから、賭博が飯より好きと云ふので、元締から受け取つた賄料を度々玉無しにして仕舞ふ。スルト腕のきくまゝに、道中の雲助を込めて、五

人持の長持を三人でかつがせたり、或は態と鹿相をさせて、貨錢をやらなかつたりして、自分の穴の埋合せをする。それやこれやで、木曾街道で非常に憎まれて、或る時三が某大名に附て木曾を上ると云ふ沙汰を聞くと、垂井の宿へ三百人も雲助が集合して、三が来たら是非とも殺して仕舞はうと誓めて居た。この噂が江戸まで聞えたので、萬傳が心配して、三を此度の供にはやるまいと云つたが、三はなか／＼聞入れない。そんな沙汰を聞ては、尙更行度いと強て望んで出かけて行つたが、垂井の前の泊りで、連れて行た人足等に酒を飲ませ、明日は我れが殺される日だが、貴様等は手出しをしてくれるな、後で骨さへ拾つてくれれば、それで満足だから、必ず加勢をしてくれるな、と云つたが、誰れ一人、はい左様なら指を喰へて見て居ませうと云ふ者がない。兄貴が死ぬなら、おいらも死にませう、といふ者ばかりなので、そんならばと、翌日は三が眞先に立て抜身を引提げて、悠々と垂井の宿へかゝ

つたが、雲霞の如き雲助が怒濤の如く押寄せて来ると思ひの外、滿驛寂として誰れ一人手出しをする者もない。全く三の膽玉に辟易したものだ。すると三は其の晩の泊りに、この荷持を一人なしによべ、と云つて、三百人餘りの雲助を残らず其の旅宿によび上げて、酒樽のかゞみを打抜いて、またも一と御馳走をやらかした。何が扱て、譯のわからぬ奴等ばかり故、この膽略に忽ち我を折て、翌朝は宿中揃つて送りに出る。其後三の勢力は、木曾では飛ぶ鳥をも落す様になつたといふ事だ。長吉が小差に引上げられた時の話も面白い。長吉は生涯「道中師の」に江戸から伏見まで十六遍往来したさうだが、其の始はやはり人足であつた(但し雲助ではない)。元は小田原の生で、同地の「米五」といふ元締の子分であつたが、或る時伏見から歸つて、小田原の小料理屋で、朋輩の人足共と酒を飲んで居たが、今上方から歸りたての事であるから、酒間の高話は、自然上方の噂で持ち切つて居た。其の中でも

長吉の話振りに、何處か見所があつたものと見える。隣座敷に酒を飲んで居た男が、御免なさいまし、と云つて、間の襖紙を明けて入て来た。これは萬傳の小差の「海」と云ふ男であつた。何か御用でございますか、と聞くと、わつちや江戸の久保町の云々の者でございますが、此度西の久保の仙石様(仙石讀岐守、五萬石)の御立に人が足りないのです、此處まで探しに來たのでございますが、只今お話の御様子を蔭で伺ひました處、皆さんが上の様子を委しく御存じの鹽梅だし、其の中でお前さんが頭立つておいでなさる様だから、見かけでお頼み申しますが、ナント友人衆を連れて來ては下さらないか、承知して下さるなら、直ぐと元締に引合せて、服装も脇差も早速持へさせます。長吉もどうしてわつちが様な者と一應辭退はしたが、昨日まで長持をかついで居た身が、一足飛に木刀の一本も差す身分になるのだから、萬更わるくはない。そばに居た仲間も、行きねえ、お前が行くなら我れ達

も一緒に居るから、と且恐れ、且喜ぶ長吉をそやし立て、否應なしに承知させると、海は直に元締を連れて來て引合せる。元締はまた大した者だ。名前も聞かずに、雜費にと云つて五十兩、外に飲代だといつて二兩、長吉の膳の隅に置いて、フイと歸つてしまつた。サアもう斯うなつては、逃げるわけにはいかない。併し我れに出来るかしら、と長吉は當惑した。スルト表を荷持の頭の勘次が負けて裸で通つた。これ幸とよび込んで、云々の次第だが、一緒に居かねえか、と云ふと、よろしい、兄貴が行くなら、我れが幾人でも人をこしらいて一緒に行くべえ、併しおらあ裸だから、と云ふので、そんなら直に衣物を受けて來い、と錢をほぶり出してやる。早速勘次も衣物を着て、こいつがシタ馬で、ソコラを廻つて、五十人程人足をこしらへる。寛永通寶(仙石家の定紋)の紋の付た法被が五十枚下ると云ふわけで、意氣揚々と江戸へ乗り込んで、どうやら斯うやら、錢タレになりすましたと云ふ事だ。

道中人足廻しの状況は、概略こんなものだが、大名が持つて歩く荷物に就ても、又面白い話がある。先づ有名な道具と云へば、「長門のカネ棒」「郡山の八の字」「紀州のお中拔」などと云ふのだ。長門のカネ棒と云ふのは、鐵の棒の長持が三本、中は石地藏だと云ふ事だ。馬鹿々々しいものを持つて歩いたのだが、これは何かの過意に幕府から命ぜられたもの、由だ。如何にも昔は下らない事をした様なもの、又面白い所もある。トコロで鐵の棒に石地藏と云ふ重い長持だから、通例四人でかついで居るが、箱根山へ來ると、二人でかつがせる。平地を四人にかつがせて、街道一の難所を二人にかつがせるのは、これもまた頗る馬鹿々々しいが、これは往昔いつの頃にだか、箱根に強い雲助があつて、自ら望んで二人でかついだのが例になつて、其の後は何時も二人でかつがせる。また雲助の方でも、必ず二人でかつが例になつたので、この長持をかつぐと、其の雲助の

譯だから、旅人が買物をして釣り錢を

一回の金を五十錢にしてしまふのは譯

は百五十文から五十五文といふ道程

した。是は元來五年限りの札だとは、其引換の節發行額の七分を用意すれば引換へに事を缺かぬさうだ。然るに此時の伊藤と關戸は此札發行の當初に於て、八分の額を積金して置いたといふが其信用を高めて、此珍現象を呈したのだといふ事であつた。當時名古屋の伊藤といへば領主よりも信用が強かつた。眞偽は判らぬが、伊藤家が尾張の十人衆の上位を占めたに就てこんな話がある。當時から三四代前の尾州侯が御手元不如意であつた時、御勘定方が大坂の鴻の池から二萬兩借用しようとなつたら、鴻の池では御一判では困るから御加判の欲しいと言つたので、然らば御分家の高須侯をというたら、否々夫よりは御城下の伊藤次郎左衛門が加判致しますれば二萬が三萬でも御用立ますというたので、御勘定方は早速歸國して伊藤と呼び出して加判の事を頼んだら、其時伊藤は涙を流して、勿體ない二萬兩で御用辦になりませうなら、態々鴻の池へ御頼みなさらすとも、拙者方にて御用立ますからと即座に二萬

兩御用立たので、爾來御用達として十人衆の上位に据ゑたといふ事だ。少し話が横道へそれたが、何でも斯ういふ次第であつたから、老爺が年少時代の一人旅には、大にこの國札の爲に困らされた事であつた。

いん又向合二万兩の札を御用立
 分家より一萬兩の札を御用立
 駿河より一萬兩の札を御用立
 三河より一萬兩の札を御用立
 那の田代を御用立
 おこす、伊藤の御用立
 又の御用立
 異うし御用立

御用立たので、爾來御用達として十人衆の上位に据ゑたといふ事だ。少し話が横道へそれたが、何でも斯ういふ次第であつたから、老爺が年少時代の一人旅には、大にこの國札の爲に困らされた事であつた。

「隨筆春城六種」

文字の藝

見聞の談話と、趣味の多岐に富んだ點において當代特に出た人物を挙げよと求められたら、記者は市島春城氏の名を答へるに躊躇せぬ。「隨筆春城六種」といふ近刊の一冊は實に此答へを裏書きするもので一讀さながら活々として書きたる泉を流すやうな興味に陶酔せざるを得ぬ。

世間の廣き、學者も多し、文人も少なくない。しかも學者にして文人を兼ね、更に俗世間の裏裏にも精しい、いはゆる通人の面目を併せ有し、筆舌共に卓越した才能を示すものは實際幾多にあるものではない。春城氏も市島氏に至つては、それ等の總てを具有する人であるから、其筆に口にするところも頗る廣汎で變化百出の妙を覺える。

隨筆春城六種に收むるところも、一讀さながら活々として書きたる泉を流すやうな興味に陶酔せざるを得ぬ。

「圖書其折々」は殊に圖畫面として又隨筆家として知らるる著者の得意とする項目で、古寫紙趣味を説いたり、北越雪譜が上木さるゝのいきさつや隨筆に就ての感想を録したりした最も有益な文字であるが、取り分け北越雪譜の由来は二十三年に細別されて馬琴や京原と越後との交遊が目撃する如く詳叙されてゐる。

「趣味談餘」もこの人ならではの感をもつて快讀したが特に「玩香」と「骨董のかけ口」の二項は啓發される點が極めて多い。

「意外録」は肩の凝らぬ談話で、隠れたる名流大家の奇行や逸話を警拔な筆致で叙述したもの、録する所眞に意外とすべきもののみで看護婦から招かれた伊藤公の珍話や、木戸公の乞食ぶりなどを始めとして、きまりきつた名士談行録などの無味乾燥なものとは全然別個のおもしろきを見せてゐる。此他奇談三十七種を集めてあるから本書は實にこれだけでも取つて一讀を江湖に薦めねばならぬ。巻末の「備口録」は世相に觸れた感で、

漢文崩しの文體が一種の風格を添へて而も驚世の意が言外にほのめいてゐる。

「塵の池」から「塵死一夕話」、「大隈侯言行録」から「隨筆山陽」と續々世に問ひ、さらに「春城隨筆」に續いて本書を出版した著者の勇氣は其筆と共に益々勇健の面影を示す。趣味に遊ぶの士はとこしなへに老いぬものと見える。敢て讀書子に此好書を編纂して俗塵を一掃すると共に知識と清興とに觸れんことを切望する。(一部二圓八十錢、東京牛込早稲田大學出版部發行)

父調査會

新書 指書

乗つての上野を舟でつとて漁をい上陸してこゝ
あひたすのひあふ
八月廿日記

漁法のかすく

蚊針釣 蚊の形の針を糸の先へ五六本付け川瀬に從ひ流す時は蚊と思は針につく此漁は小鮎を釣る漁にて六月より七月初め頃迄とす

かけど 糸の先へ針五六本を付け針の少し上に鉛の玉を付け川瀬に從ひ玉を投げこみ川中をこるがす時は其針に鮎がかかるのです此漁は一名「コロガシ」とも云ひます

友釣 鮎の生きたるものを一定糸に付け其の先に針を流し置き川瀬を見計らひ鮎をおよがせ置く時は友をしたたい來り其針にかゝる故友釣と云ふ

鵜繩 三四十間位の麻繩に鵜の羽を付け漁師二人にて兩端を持ち川下より追ひ上げ圓形を造つて鮎を一ヶ處に集め一人の漁師是に繩を投じて捕獲する方法です

眼鏡取 六七寸角位の箱の先へガラスを付けて眼鏡箱を作り川の中に入り其眼鏡にて鮎のおよぎ居るのを見つけ竹の先に針を錠形になし付け置き此針にて鮎をかき取る方法で餘程手練を要します

張切網 川瀬の淵に水のたまり場所へ入口一杯の長き網にて張り切り次第に詰り行き魚を取る方法にて家族的のお遊に至極適當です

いけす 川の淵に流れに從ひ堤を作り上げ上下にすだれを張り其中の魚を捕獲する方法です此方法は前夜鮎の此の作り置きし中へ鮎が遊びに這り居る所を上下にすだれを張り置くのですから前日御申込みでなければ出来ません漁です

鮎五郎引網 此漁は川の水のごりし時に用ゆる地引網と同方法です

五郎引網 此漁は眞夏の水の極少き時に川の深き處にかけ すゞき 鯉 其他大魚を捕獲する方法です

近し四十圓を越した
●現貨の半分は、買入を以て
かれこれと整理するものも、冷静
の観念となると、是は真ひない
●買入の整理は、買入の整理
買入の整理は、買入の整理

三	二	一	...
...

第一區の警報

氣迷ひ氣分
第一區警報となつて、米相場は、
平穩であるが、買入の整理が、
買入の整理が、買入の整理が、
買入の整理が、買入の整理が、

安保令(後學)

安保令(後學)
安保令(後學)
安保令(後學)

米市場

米市場
米市場
米市場

取組と出来高(大)

取組と出来高(大)
取組と出来高(大)
取組と出来高(大)

上陸し、
八月、
...

...
...

期米朝

期米朝
期米朝
期米朝

八月、
...

...
...

東京米算

東京米算
東京米算
東京米算

得た。おまると代心の項中にも自分が引合へて出
てゐる。おまると他人の心と書を入るを自分のよき
こと後をこしと云ふこと

何合神性素弱と書く。一方、漢文の方
から、文士と無理解を奉命と云ふ。攻めら
るの物、中宮と云ふ。市島と云ふ。か
「君の面前と云ふ。出てゐる。好いから誰かの心を
つて。まゝ、検閲の名儀を附けて書きた
も好い。此ういふ。諷解の下に鏡花の義血
「血」流の白糸も出た。花代心の「笛吹
川」も出た。このいふのもおまると書を
のいふ論

シナにも文分記。腰もこのか、おまるとの方の記
腰が書きたる。おまると書を

ひまの任かせも亦隨筆一冊出版を志して時今
いろくユルとして其の材料と云ふへきものを胸

臆から探つて受書を作つてあるが、まづ一巻とす
ルけの趣向が主たるかつて、回顧録といふを一
巻出して見ようかと思つたこともある。若し意見を
やつとせんば、おおよそ原稿が出来てある。自分の新
浪子校時代の書や、改次と関係した如終のころ
や、沈初頭、文々の回顧や、早大の思い出
や、語るおぼろの長篇などある。コンナものを編
成するの回顧録は、さう出来さげんか。意見を
為すことを躊躇する。意見は自分より、回顧録
家定待と云つて、いふも、回顧録
をいふより、非常の経歴を考ふる人然
と、いふも、回顧録の人が陽世の道に、いふも、いふも

を材料とするものばかりならず、自令も元人の如
し経歴古今の表の文人や政治家などの浅学空疎の
ある傍うしおもしろく、才三者に讀ませる興を
そと程のよむるも、六自負する。こゝろ著述
ハ死後目人が出せば或るもの誠を傳ふる外も知れ
人が自から進んで出さるもの。併しそのハ云ふが
自家の経歴を令て振うて逸筆をよ書けるものと
ハまゝ、こゝろまゝ出して二三の逸筆をよ事實回顧
録が多くと收めである。別と春城六程のハ多く載
つてゐる。感懐深き追憶の如く、秋室森の雙法
ハハ勿論回顧録の他の數篇も追憶の
か多く挿入してゐる。唯此回顧録と題を命

しこゝろのと才三者に讀し興味を興くることを主とし
たまひ、事實の回顧録である。自分の生涯の経
歴をも、世に残すは是れいけんも、こゝろを殘せし
とするものハ方便が興の記述の如く、こゝろの隨筆
もふりこめ、ハ施設念ハ然然と観ハあつても、
こゝろが、すまゝに於て経歴談の如く、回顧録
の如くある。こゝろ刊行した隨筆も漫れと讀め、
著者個人の記述の如く、やうな思ハれも、こゝろが、
ハこゝろの如く、何んかといふを隨筆に、托して自己
の経歴や趣味などを陳べるハ、秋室の如く、口を
あふ、恰も山陽が日本外交の論議を、こゝろの経歴を
そのめかして、不朽を圖つたと曰し、こゝろが、



秩父宮の橋上つり

上高地に向はせらる、御途上

左から二番目が殿下「丸山特派員謹寫」

真に對し誠意感得る、やかな梓川のせらぎの音に明一御起床遊ばせ、直に對しませ

個人の内歴とハツキリ鏡を打つたもの多くの人に
後まゝに倒く後まゝに早く委棄せしむるもの
である。馬琴の夫の内歴をひても、其の大小名若
であるハ大儀の終りよ附してあるから、まゝが待てるの
である。別々其事を一冊に書き綴つたとし
以て恐らく待つことまゝ。まゝの事を思ふと、久松
逸筆の内、自述の事歴を托する方がよいの
で、今から心んとする逸筆の方針も、前のと般
々同じかゝるを得ぬ。殆ど自家の内歴をあらわす
ことと偏さんか、あふ失敗の帰するものあり(八月
二十三日記)

(二) 昭和二八年八月二十三日 (日曜)

爽やかな上高地の朝を 明神池で岩魚釣り 早速御手料理の御興

秩父宮、午後は大正湖に御舟遊

〔松本殿〕秩父宮殿下には廿二日午前六時卅分御起床、この日は絶好の快晴、殿下の御居間は清水屋の新道二階用の間で前面の東方は六百岳の三本槍及び鷹潭岳がそびえて朝日を受け南方には焼岳が靜かに白煙を吐いて大正湖に映じ西は燒岳硫黄岳を背にし又北方には西嶺高岳と

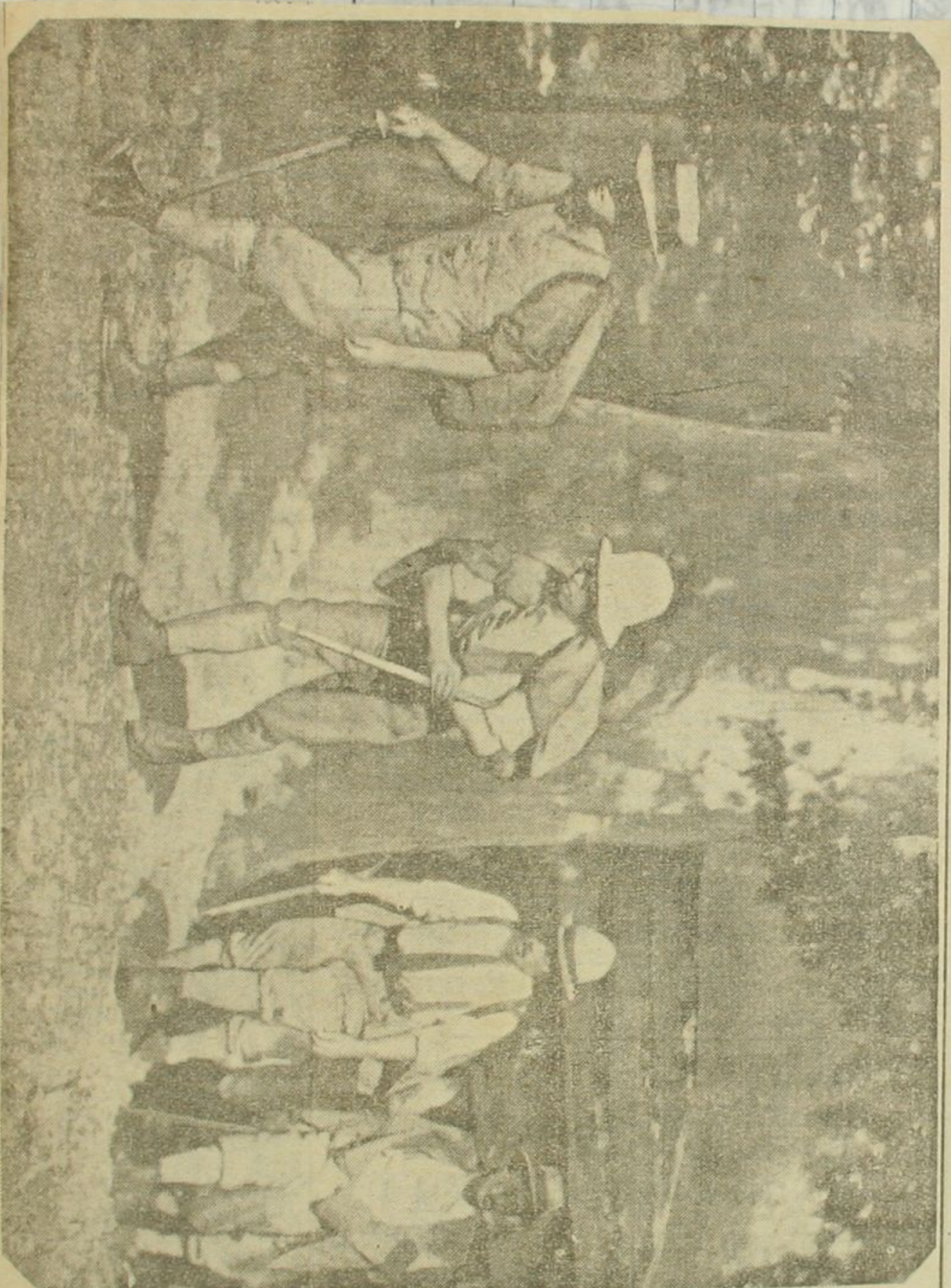
明神岳 が碧空にくつきりと現れて残雪を留め上高地の朝は一しほ爽快である、午前八時半御朝食を遊ばされ九時半殿下に

は前日同様登山服を召され信濃山臣宮長矢澤米三郎氏を先登に供奉の人々を従へさせ明神池へと御探勝に向はせられた、午前十時半明神池へ御着、仰げば高く雲表にそより立つた明神岳はいよ／＼雄大な池の水はます／＼澄んで

風光は一段と幽邃となる矢澤會長は上高地の地勢とその付近の高山植物について御説明申し上げた、殿下には圧言及び常次郎の山男が携へて来た釣竿でいな釣を試みられた殿下が御竿を持

ち給ふ程なく一尺余もある大きないながつかつたので殿下は非常に御興の御模様を拜した、それより殿下は付近で化粧御などの新発見の植物について御研究遊ばされ梓川のほとり水清き木陰にて殿下自ら御釣りになつた

岩魚で 御食事を召させられかくて午後三時一旦御飯館なる清水屋に引揚させられた夕刻よりは御輕装にて田代池の御探勝後お伴の人々と大正湖に舟を浮べて舟遊びに御興を催される筈である



上高地の秩父宮さま。岩魚留御通過
—先頭は横氏、次が殿下【廿一日午後三時四十分】

(B)

開新田東京東

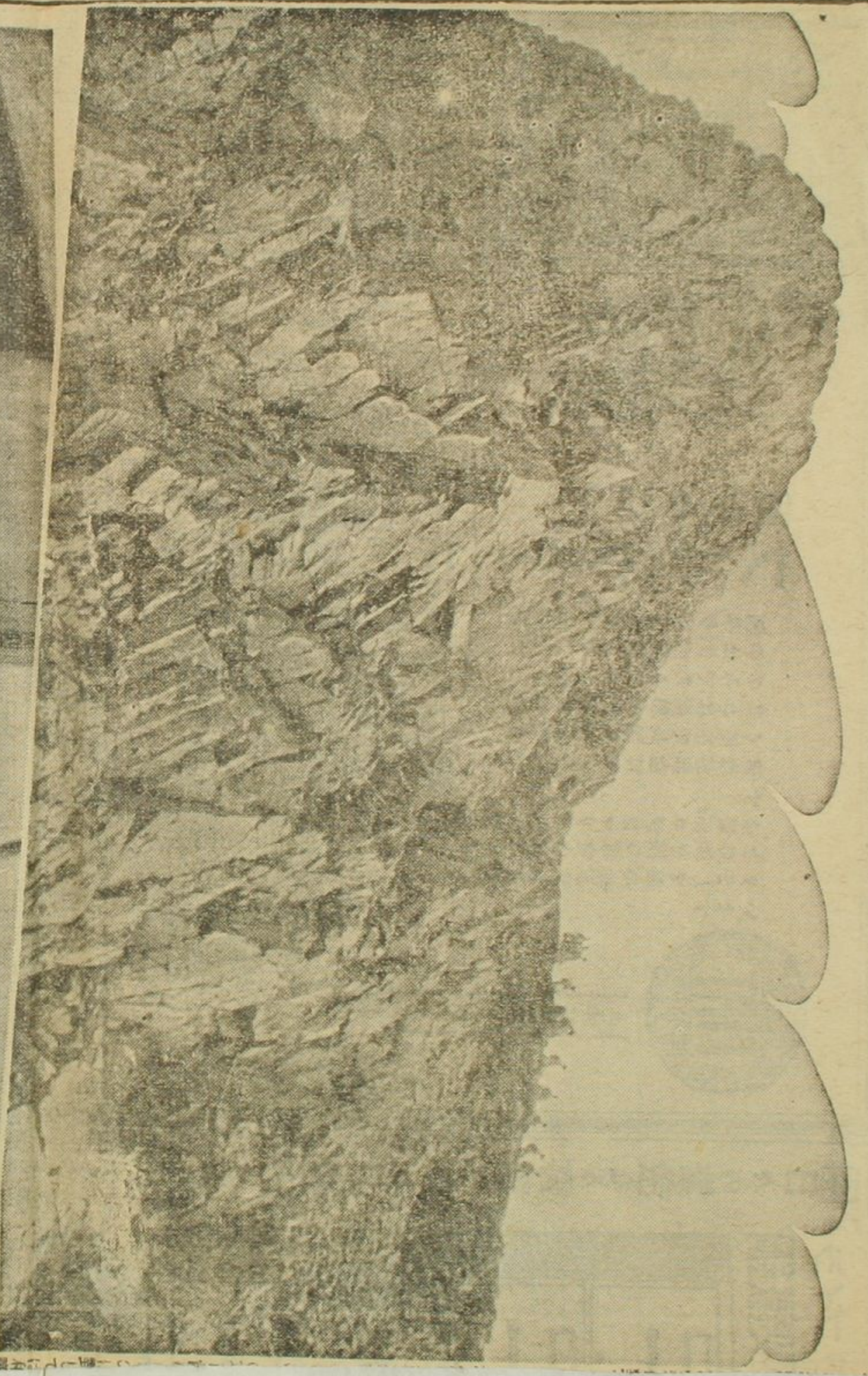
(B)

が氣からなるといふは、淡淡の味に似てあると人々を如何に
又氣からなるといふは、沈沈することもある。和の酒
と好むけんども氣からなるといふは、丸に呑まぬこともあ
る。こころに氣を分るゝ支配するゝのが自然に似てある
まいか。またこの人をして素樸、白朮せしめたら、大抵
の氣から家であるまいか。いろく氣取つたり、理窟
をつけたり、儀法をいしたりして強て天真を没し、
すなりとも人々あるか。また、偽善家があつて、
の鏡に照らして見たら、夫張り其人の氣から家である
ことか、さうけし出せんか。まいか。天真爛漫をい
ふことも、文の氣から家としての形容語のなごころぬ。日
本の國民性といふことも、ゆるゆる淡泊するといふ、氣から

が大なるフアクトルとなるのであつて、無らうか。日本人
の正氣は淡泊に性急な支那人のことと、複雑性を
たぬ。例を全部ひらいていふと、七氣から家が國民性
する特性があるまいか。自分の大衆の一部分として同じ
性格を有するといふのであるか。思つてみる。自分が隨筆
山陽を著いたのも有体、云へば或る氣から、
いかにある。またかぬ。廿二史劄記の七、公衆の二、其の
一、或る氣から、投したの七であるまいか。山陽の如く
人氣があつて、今もあつて、益々持て罷るゝもの
つくり國民の氣からには、まゝにやがたからである
まいか。人氣といふ言葉、七つくりの氣からと云ふ
こと、帰着すると思ふ。山陽の人氣のある

神を告ぐんとし神後みたりと思ひ付いたことを
きつゝ

○大震災の記念日たる九月一日は早や一過り
とらぬ間道に迫りたると思ひ立ち無物と信じて女
児を呼ぶをよみ午後本町の被服廠に
訪ふこと大震災の際に被服廠を造り
の生霊の命を救ふに也。災後五年を隔つて
今もまじく此の被服廠を造りしに
思儀もなきに似し此の被服廠のある
所は末もあつた復員したる
の道を今も築つたあつたも
あつた人もあつた未だ救はれ



穗高における秩父宮殿下
 (上)御一行奥穂高頂上を降る(下)穂高小舎前にて御手をかざし
 て四邊の風光を賞でらるゝ殿下(丸山特派員謹寫)

按察した

「本邦特派員二十五名」 在外特派員諸君は不下二十名が精には数に達し、海外特派員

東京朝日新聞

日四十二
 第二金價定部一月夕
 刷向本種 刷印装編
 一ノ三町業有區町誌市京東
 社聞新日朝京東



雷鳴とどろく中に 見事難所を突破す

岩壁傳ひの大冒険

殿下にも又全身づぶぬれに
 廿三日午後七時溜澤小舎にて 藤木特派員發

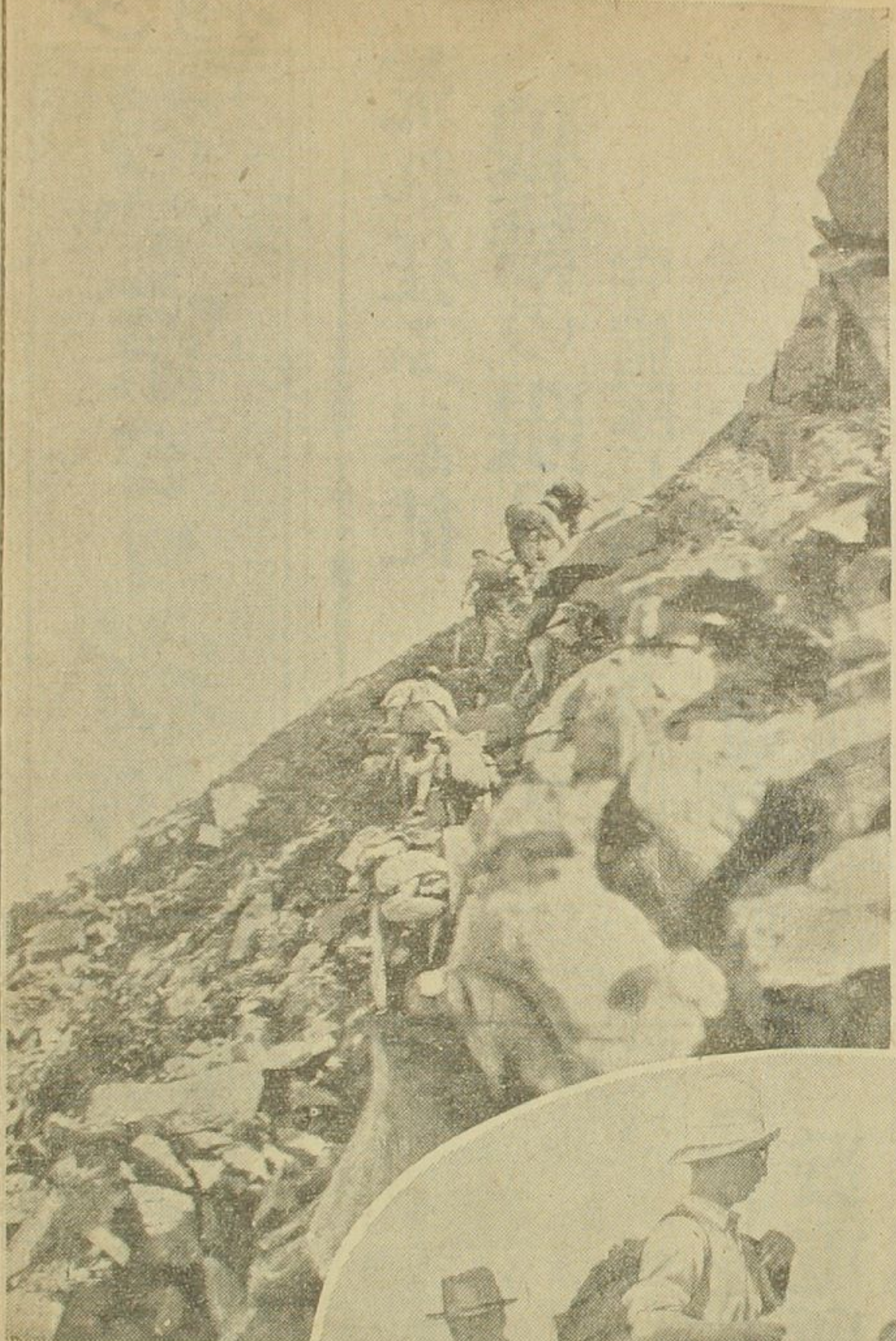
一隊に 分ち第一隊は極
 有悔氏が先頭となり第二隊は殿下
 三位に岡部氏が位置し第二隊は渡
 邊御用係早川氏である殿下御使用
 のロープは絹製のものを
 で昨年マッターホルンで御使用に
 なったものである、この山頂傳

網来の快晴でふけい谷を隔て、笠
 岳、双六等殿下が近く踏ませられ
 るコースを望み遠く養師岳から
 立山の 方面まで展げて
 居たが、ザツテルを出発した頃か
 ら上高地の谷方面から一團の雲霧
 が奥穂高の付近にまっはるかに思
 ふよがて驟雨が降りだし間もな
 くくわう然たる雷鳴を伴
 った、横氏は「ピツケルを
 外して下さい」と殿下に
 御注意申あける、アルプスの岩場
 ではピツケルの鐵部に感電して感
 死する例が多いのだ、積りて三四
 回雷光と共に物すごい雨が極高の
 岩壁を覆すかと思ふはさ鳴りミ
 ころく、その時岡部氏は手につい
 て居たピツケルに

【警備新聞】
 新入士同士の
 放火嫌疑
 九人の老人

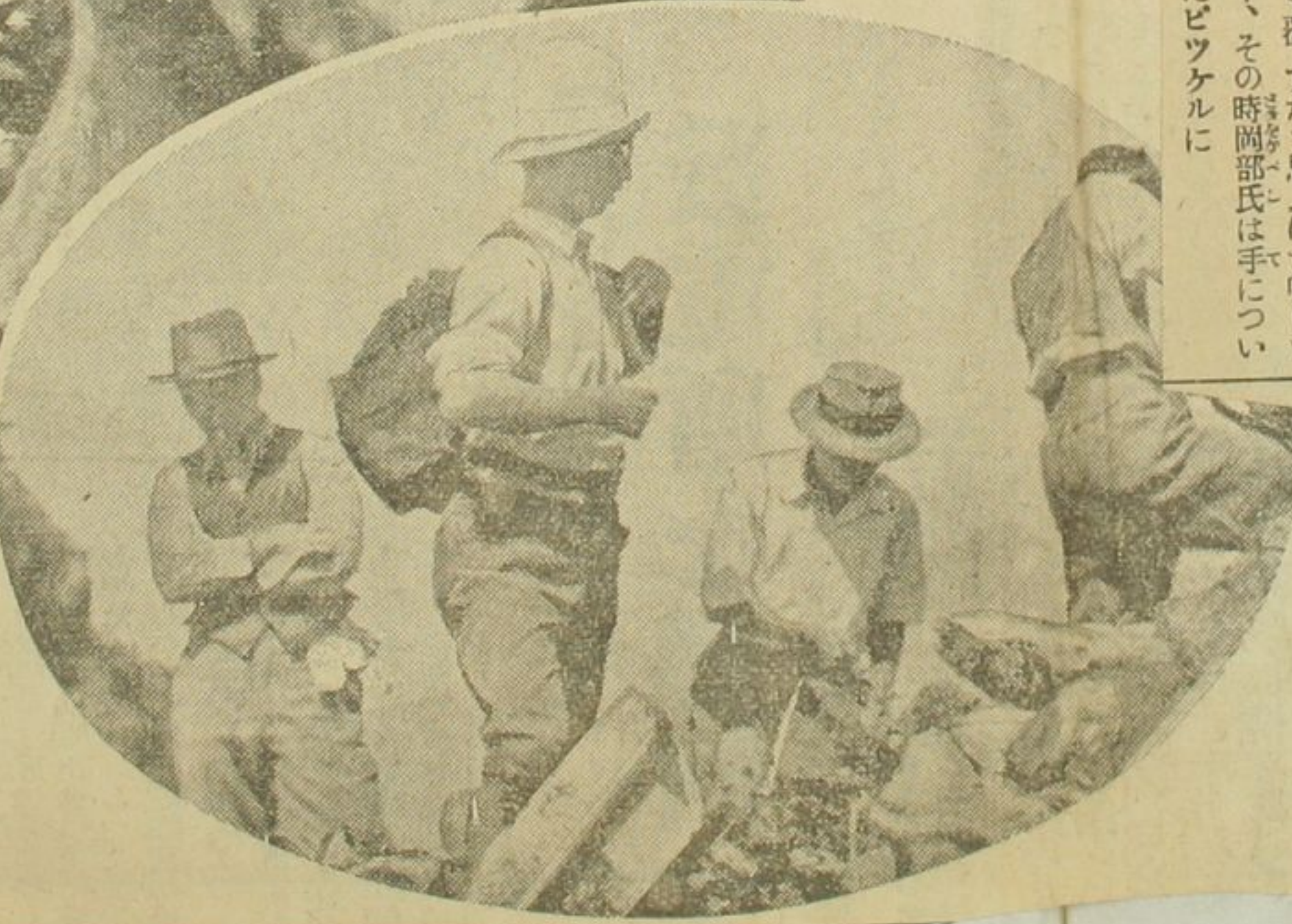
【警備新聞】
 放火嫌疑
 九人の老人

【警備新聞】
 放火嫌疑
 九人の老人



ロップを頼りに絶壁を攀ちて……

奥穂高御縦走の秩父宮「前」から三人目——下は絶頂にお着きの殿下



露機イルクー
 ツクを出發

【モスクワ廿三日發】(聯合)
 日飛行の途にある露機飛行家シエ
 スタコフ氏は二十三日午後十時イ
 ルクーツク著少憩の後午後二時更
 に東に向け飛行を續けた

東京朝日新聞

日四十二
第二金價定部一刊夕
新聞本業 印刷製編
一ノ三町榮有區町路市京東
社聞新日朝京東



つたが縦走路中の最難場に来たので、先頭の横氏は「殿下、暫くお待ち下さい」と申あげて岩壁のわれ目にピトン（岩登り用くぎ）を打ち込み、更に捨なはと補助ロープを使用して無事この難場を通過する事ができた、更に奥穂高、ジャンダームミサツツルの手前二枚岩にも捨なはを使用し、かく降る雨をついて一行無事奥穂高の

雷鳴とどろく中に 見事難所を突破す

殿下にも又全身つぶぬれに 岩壁傳ひの大冒険

廿三日午後七時濁澤小舎にて 藤木特派員發

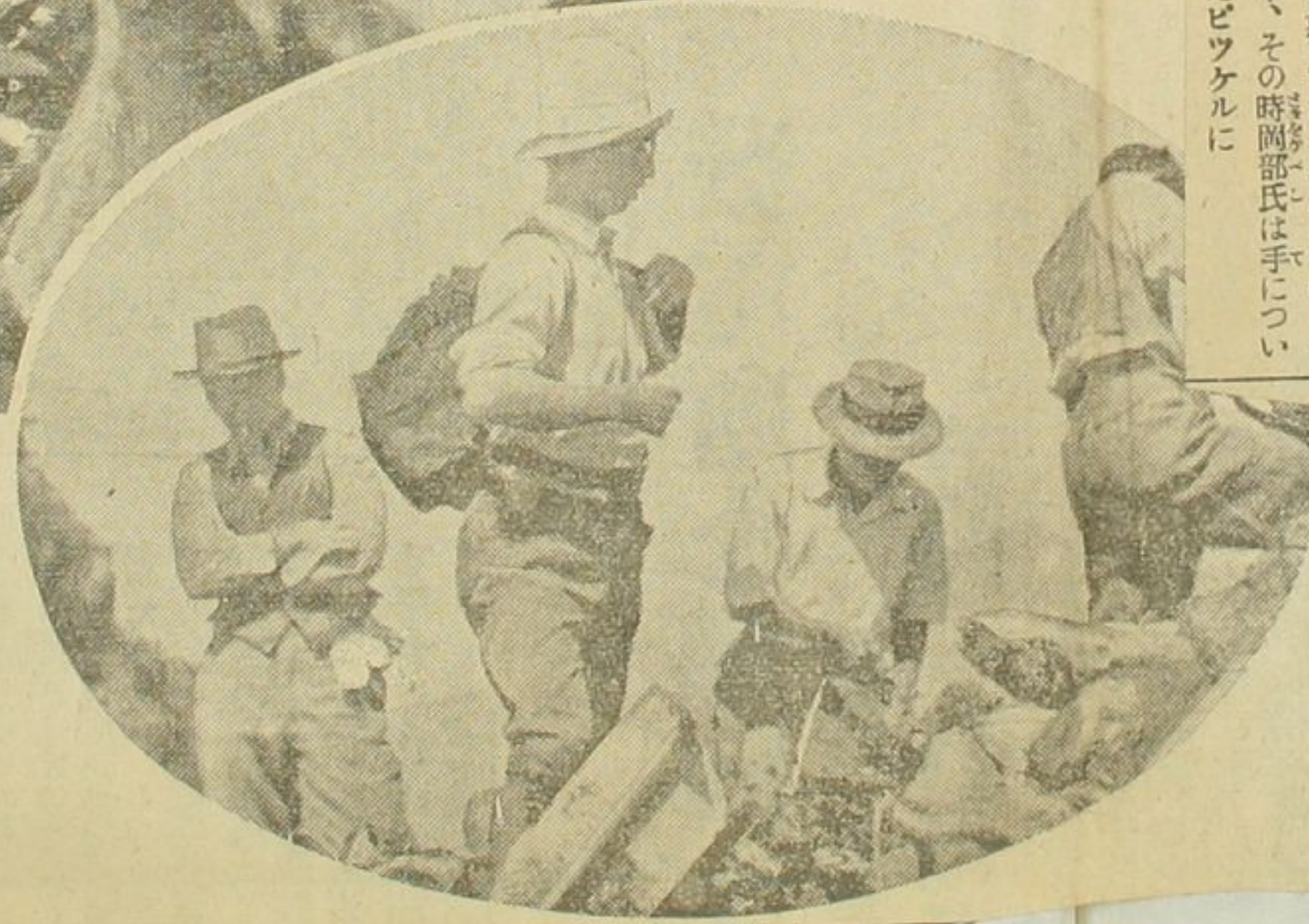
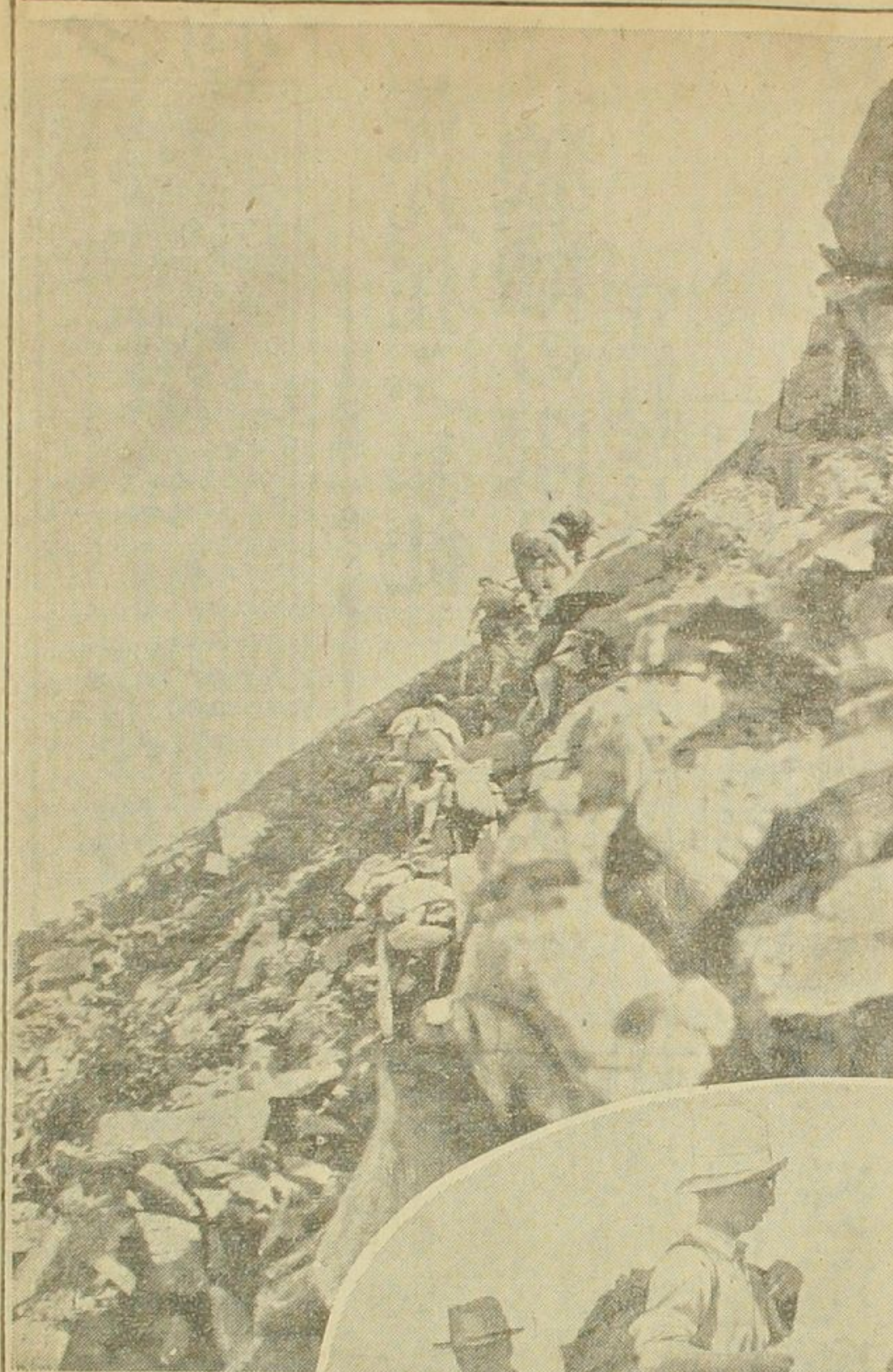
秩父宮殿下が奥穂高西尾根の險難を御縦走遊ばされる廿三日は来た三日前は所川谷を上り九時四十分奥穂高西尾根の中間にある大キノツトに御到着し、から殿下にはいよく壯快な岩上りを決行遊ばされることなり一行を

朝来の快晴で谷を隔て、笠岳、双六峰殿下が近く踏ませられるコースを望み遠く薬師岳から立山の 方面まで展げて居たが、サツツルを出発した頃から上高地の谷方面から一團の雲霧が奥穂高の付近にまつはるかと思ふにやがて驟雨が降りだし間もなくくわう然たる雷鳴を伴つた、横氏は「ピツケルを外して下さい」と殿下に御注意申あける、アルプスの岩壁ではピツケルの鐵部に感電して震死する例が多いのだ、横氏は三四回電光と共に物すごい雨が奥穂高の岩壁を覆すかと思ふはさ鳴りミ

感電して手がしびれたといふ、雷鳴が激しくなるに連れ急雨が降り注ぎ、山頂の岩壁の間に身を隠す隙もない、一同はしのつく雨にさらされたままピツケルを岩壁にたくしてうつくる、雨は容易に晴れさうになく、益はけしくなる、雨具もかうした場合には用をなさず全くぬれぬのやうになり寒氣は身ふるひを催す、かうした間でも殿下には少しもひるませられる様にもなく「奥穂高でかうした大雨にあふふには、一層だ」と仰られる、まことに雄々しくも偉い次第である、待てともやむ様もなく、少し小やみになつた隙を見て横氏は「さあ、でかませう」と促し、暫く山頂を通過するか、飛脚をからむかについて攻めた末、断然山頂縦走に決して進むかくてジャンダームの東ピートの陸路にさしか

ロップを頼りに絶壁を攀ちて……

奥穂高御縦走の秩父宮「前から三人目」―下は絶頂にお着きの殿下



露機イルクーツクを出發
【モスクワ廿三日發】(聯合) 日飛行の途にある露機飛行家シエスタコフ氏は二十三日午前十時イルクーツク若少恩の後午後二時更に東に向け飛行を續けた



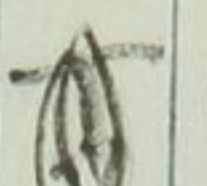
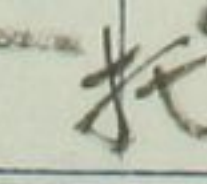
山氣清々しき今朝の奥穂高にて

〔本社丸山特派員撮影〕

寫眞は種小舎に一夜を明された秩父宮殿下の一行を今曉五時本社丸山特派員が隨寫して鳩に託して本社に届けたもので中央後向きのが殿下、重いリニツクサツクを脊負はせられた脊には汗のにじみすらあり、こぼれて御登坂の困難さがしのばれる

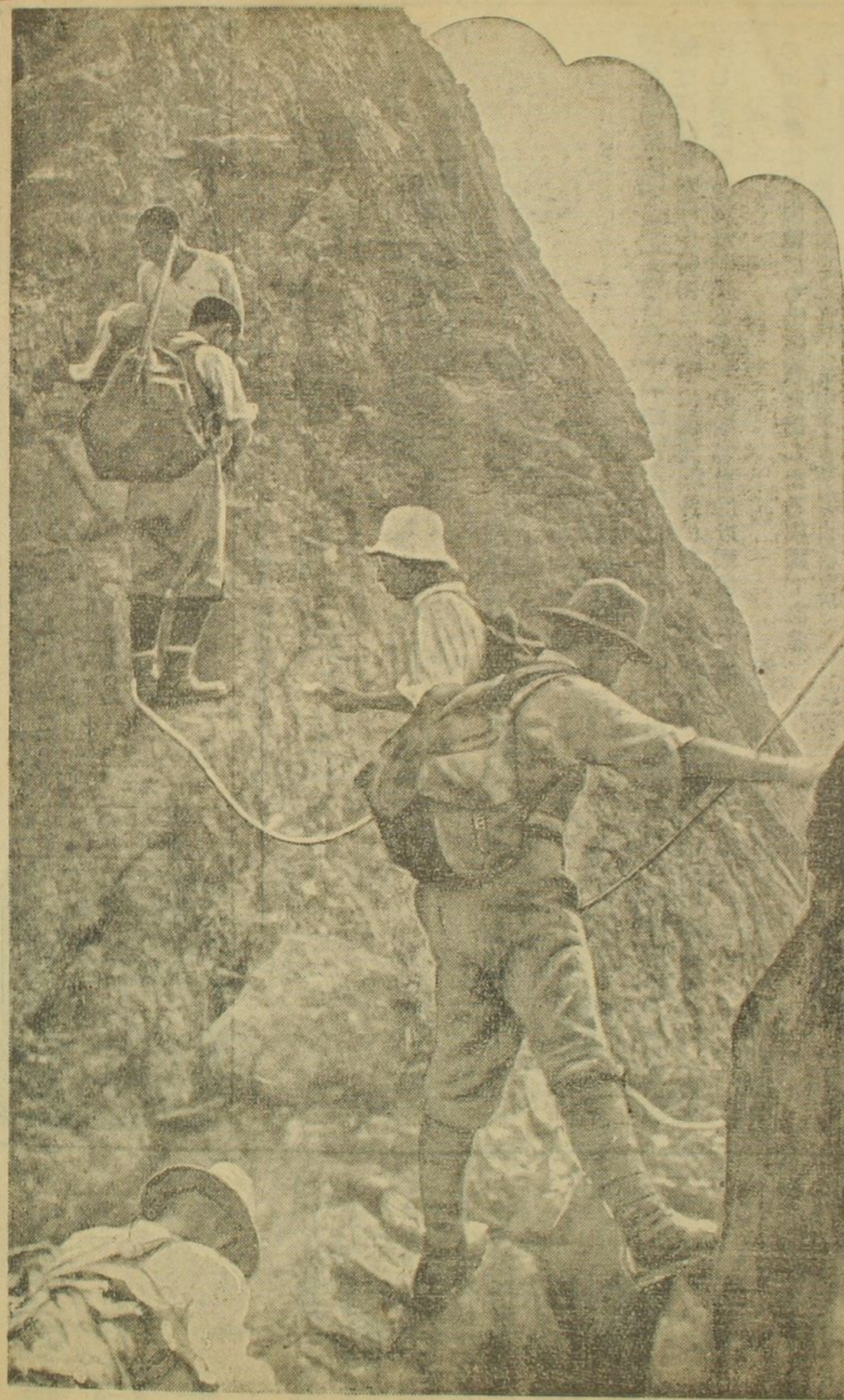


よめとてえし来れ、自合らぬ書生時、代るに登山懸か
あり、可き峻険の山を踏破し、そのを怪しむれば
今の克しるんが出来ぬといふことを遠慮とする。保し
山の味を知るよりの新入の地記を、後必の日記に
情するい所がある。遠慮するも吾等の少壮時
代、の岩を、釘を打つこみ、ロープを結んで
攀ることか、まじい行いんるうら、此の経験の
いうを特々遠慮を感じする。保し、互主の岩を
を、杖を用いて登ること、程は別懸であ
る。釘とロープ位の杖、許さぬも、
が、更し巧み、たゞ工を、えんれば、杖を用い
ぬ、おれ、且つ、岩も、よく、登り、得ること、あるべし。

よめ、登山攀者、の、名、登、る、の、危、険、が、付、ひ、ハ、こ、そ
冒、険、的、ス、お、ん、ウ、中、の、冒、険、性、の、よ、も、と、せ、る、
の、こ、と、ある。私が、昔、年、時、め、義、の、奥、の、白、雲、山、を
攀、り、た、頃、ハ、釘、も、ロー、プ、も、用、ひ、な、是、を、
す、る、よ、り、一、岩、石、を、攀、り、た、所謂、三
橋、と、ぬ、く、る、原、の、絶、頂、と、す、る、こ、と、が、出
来、る、の、比、が、あ、る、内、者、か、先、の、登、つ、て、上、か、
手、を、出、し、て、引、上、げ、し、く、る、の、こ、と、ヤ、ツ、ト、登、る、こ、と、
か、之、未、比、が、弱、る、心、膽、を、寒、め、ら、し、あ、る、よ、め、あ
つ、た、こ、と、例、と、し、て、ハ、こ、と、よ、め、か、釘、と、ロ、プ、
を、用、ひ、た、所、に、後、り、か、ま、い、び、也、あ、る、ま、い、

八月廿五日記

一本の綱にすがらるゝ秩父宮殿下——中央の白帽が殿下、奥穂高にて藤木特派員藤高



秩父宮の 穂高行

大縦走にお伴して——
特派員 藤木九三

去年の今頃、秩父宮殿下にはグリンデルワルトを根據地として今回の穂高行にもお伴しあける渡邊御用係や横有恒氏たちを伴はせられ、ベルニス・オバーランドの山々をよぎさせられてました。この外最近アイガー峰の新登はんにも成功して日本の登山界に新しいシヨックを興へた松方、浦松の両氏を始め松本、麻生の諸氏もお伴を申あけたのであったが、私もそれ等の人々と共に、ベルニス・アルプスの王座と呼ばれるフインスターアルホルンのスキー御登はんのみぎりをはじめアルプスの山行中しばしば殿下の御一行を同じうするの機会を得ました。殊にマッターホルンの登はんには連続二十時間を越ゆる氷と岩との劇しいクライミングにもさの御疲労もなく勇健な殿下の御動作を拜し、その間親しくお言葉を承り、山登る男としてこの上もない光榮に浴した次第でありました。

双六谷へ

漸く危険箇所を脱せられた
秩父宮殿下の一行

〔松本廿六日双六小屋にて青柳、石川兩特派員發〕あざやかなロップ・クライミングで見事小槍の絶頂を極められた秩父宮殿下には直ちに靴のひもを締直し一行五人と共に双六谷へと廿六日午前十時槍の肩の小屋を御出發、道は開えた峻峻な西尾尾根で一步誤れば千仞の谷に白雲が渦を巻いてゐる、十二時十分漸く硫黄澤の乗越に御到着、御食食を取らせられた、硫黄澤の頭に差しかるや、**危ふ**、またた天気は遂に烈風となつて氷のやうな冷たい雨、

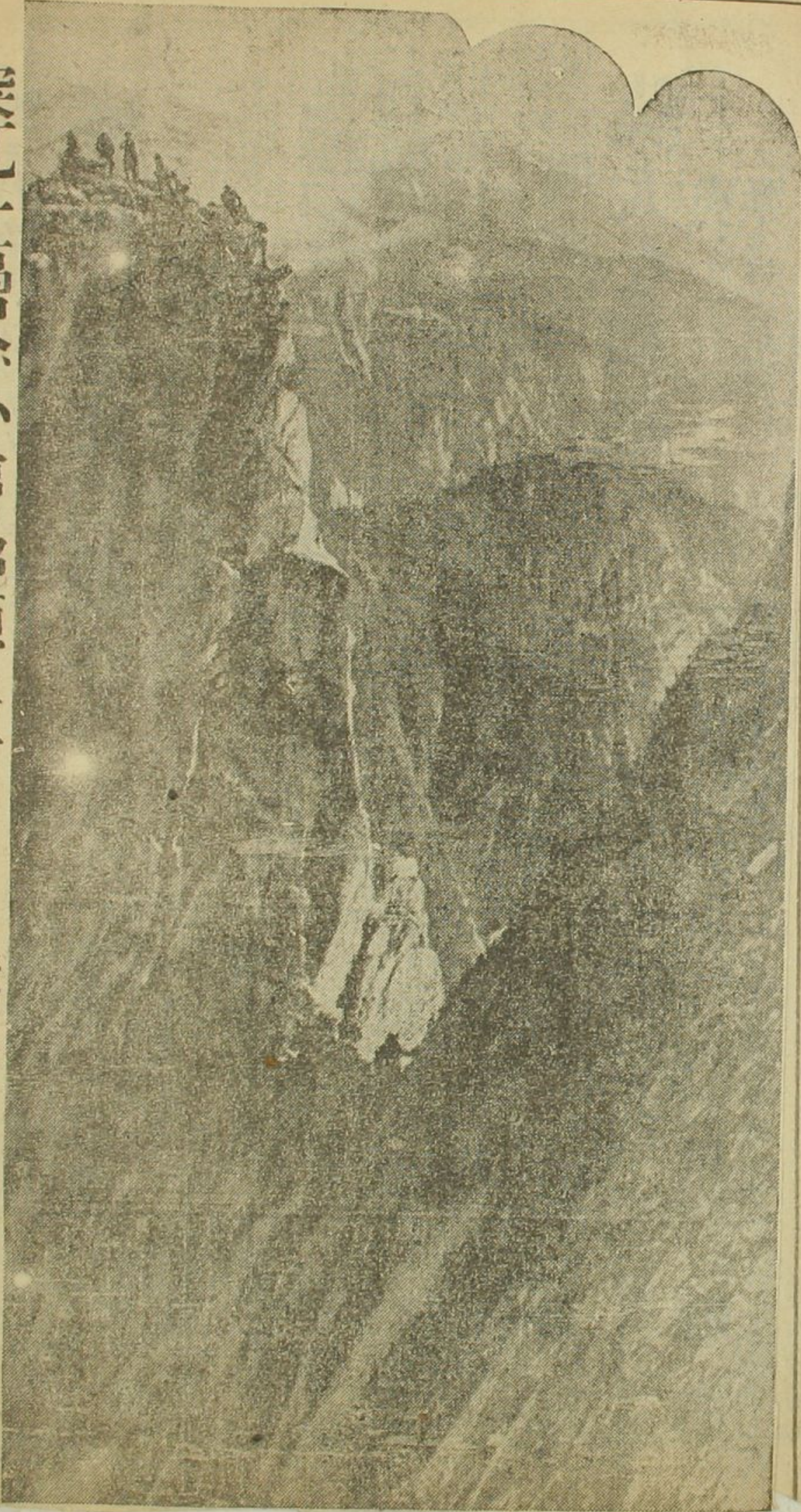
キヌガサ草等の高山植物が草履を作つてゐる

は横なぐりに頬を打つ、硫黄澤を越えて樺澤岳に差しかる頃には雨は幾分小止みとなつたが風は相變らず谷から吹上げて来る、しかし山の姿は一變して道は漸くなだらかなり危険の箇所は脱せらるこの時調然として眼下に展開する緑の草原は殿下が今たどり着かせらるべき双六の山腹である、双六の小屋の前には清れつ鏡の如き双六の池があり付近

一帯に黒百合、千島フクロ、キリンシマ草、鹽釜フクロ、

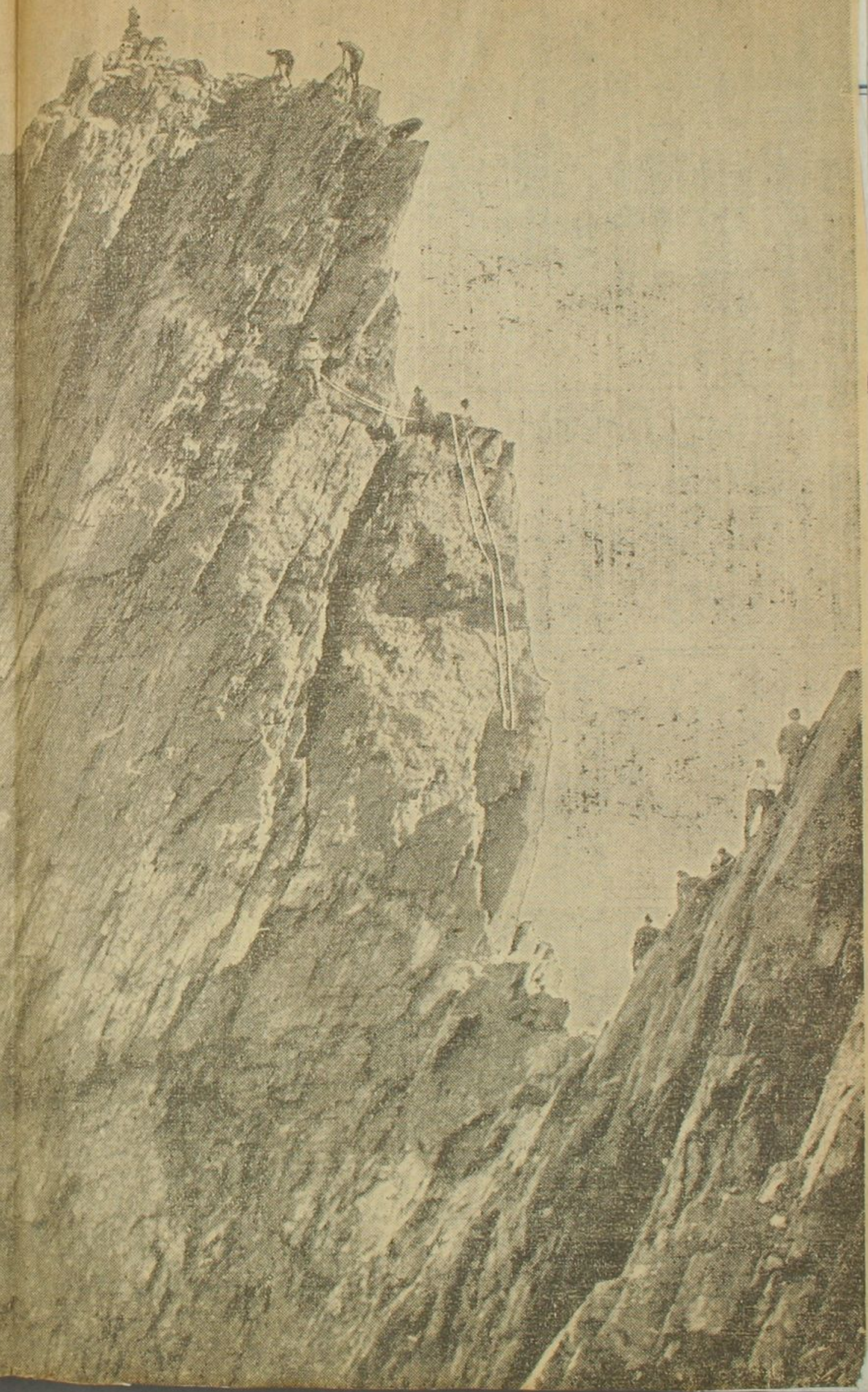
突凡一萬尺、小槍の絶頂に立たせられた秩父宮。

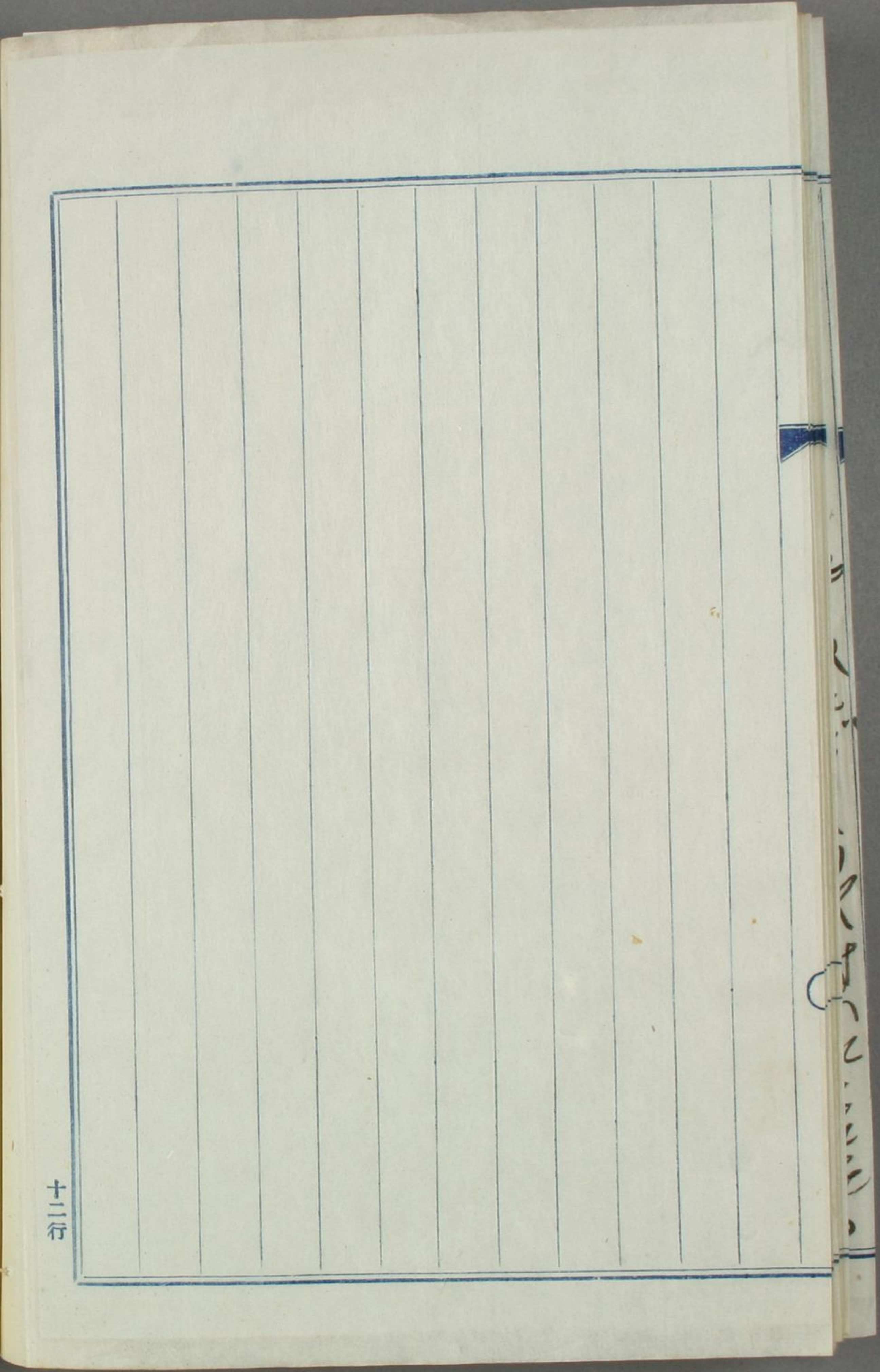
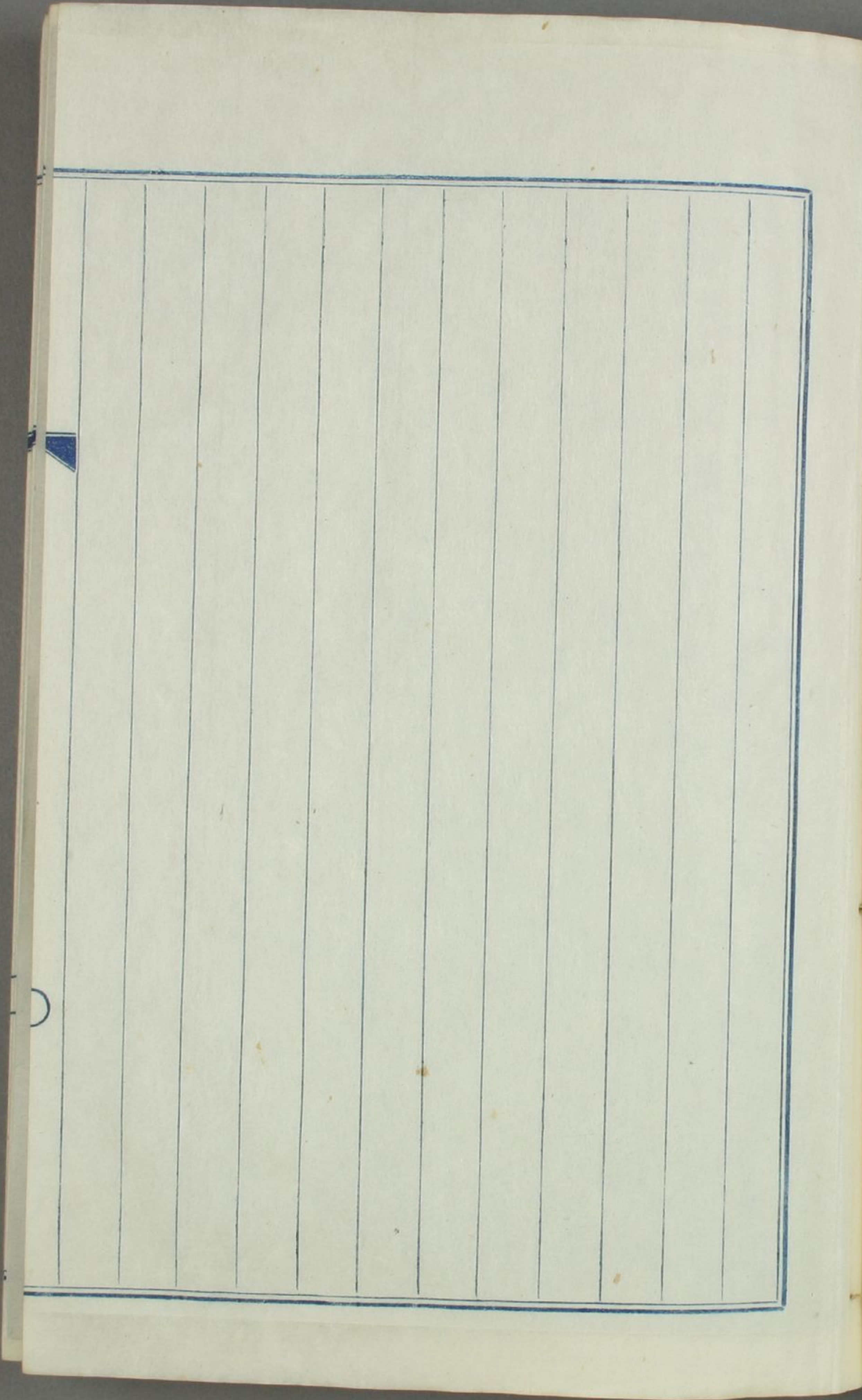
(左から) 廿六日朝



そより立つこの絶壁をよぢて「小槍絶頂の秩父宮殿下

(右側の白帽) 丸山特派員撮影





○此の二つの酒を肴とて、お手、河井、葉、俊
と山田、清、徳とをう、（人）余の宅に、米、合、い、せ、れ、の
を、拉、し、て、祿、楽、改、び、二、軒、を、不、代、又、四、ハ、二、浪、傳
音、附、軍、勢、の、き、お、お、の、打、合、も、や、つ、れ、あ、四
美、次、ら、し、も、三、千、四、の、寄、附、の、あ、り、た、報、を
受、け、た、彼、は、後、額、十、萬、の、田、に、進、し、た、功
定、十、一、月、末、に、五、萬、の、田、を、り、と、く、と、余、其
地、を、改、め、月、法、が、隔、を、施、給、え、り、と、う、り、湯、く
四、者、刑、行、合、と、や、つ、れ、吹、の、流、山、の、も、と、出、つ、山、
ハ、合、給、也、（人）幹、の、し、も、の、也、今、の、海、騎、校
正、の、も、と、は、つ、つ、れ、校、友、の、も、を、自、合、に、ま、
と、忘、れ、た、れ、大、河、の、お、り、不、割、給、え、り、流

勤、三、浪、傳、と、あ、り、本、林、正、格、権、分、つ、と、大、人、其、所
在、に、傳、へ、し、今、の、御、軍、勢、後、と、あ、り、浪、傳、の、米、新、所、
に、お、人、と、ま、つ、れ、米、光、其、月、を、皆、合、の、休、事、に、
興、つ、れ、よ、い、あ、り、米、光、の、校、友、は、さ、う、幸、田、の、友
傳、の、つ、人、に、お、説、と、考、さ、例、傳、も、や、つ、れ、此、人、の、此
念、の、野、う、り、も、を、自、合、に、今、も、不、有、し、と、あ
る、合、石、を、任、在、に、あ、り、米、光、の、流、が、出、れ、の、い、れ、
の、石、の、身、由、も、も、お、い、流、へ、は、（人）浪、傳、の、流、傳、
に、お、吉、の、東、伍、ハ、甲、艦、を、校、し、と、威、は、海、衛、
向、つ、れ、が、美、と、可、艦、に、從、軍、に、記、名、三、田、村
玄、龍、の、在、つ、れ、と、七、初、め、山、田、か、ら、ま、へ、は、（人）塙
田、義、一、の、美、葉、と、い、は、塙、田、の、田、宗、光、の、名

威一印の往名一に美世業講の好日といふ施
物を元宮の歿後継承しと名を改めと名刊
しといふもあふが、後に高世業講を興行す
るにあり、美世業講習好しと名をのけたり、亡友
の遺世業の舊名に遺えしといふひあることか
ぬに、山田増子(妻)増田の世に、同好の同好
ひあふ、既後(うし)お申の人物が揃つて出に、特
業に値する。上の岳父總管庭宮村(世三)や
の任歴其の家系を、既に初め山田か
番しい話をやさし得に、甲州こと記つれ
お申の遺世業の家を交代ひひあつに、既味家
ひあつたといふ事き、留置村の如きことひ、出に、

御あひまのこわつた、傍善画執り、新山田
が書い此ののあふといふか、と人借り受け
の約束をした。時村抱月と親しの話といふく
出に、中二、河井から今之、さあ、さう、同
二美公といふ話と抱月の老ひ初めたりといひ
る程のモ、いふと、いふひあることを、さ
し。御神後、後、後、七出に、谷地、風の、話、の、
二、改、早、の、浅、谷、尾、といふ、堀、橋、二、男、女、二、人、が、同、浴、の、風
呂、か、あ、り、後、傍、の、親、い、ふ、と、い、ふ、話、七、出、に、木、林、(五、松、
権)ハ、野、多、多、淫、ひ、刺、身、一、片、を、か、へ、一、脚、か、出、
未、十、片、か、へ、十、脚、を、敵、と、さ、さ、さ、の、話、七、出、に
(八月廿六日記)

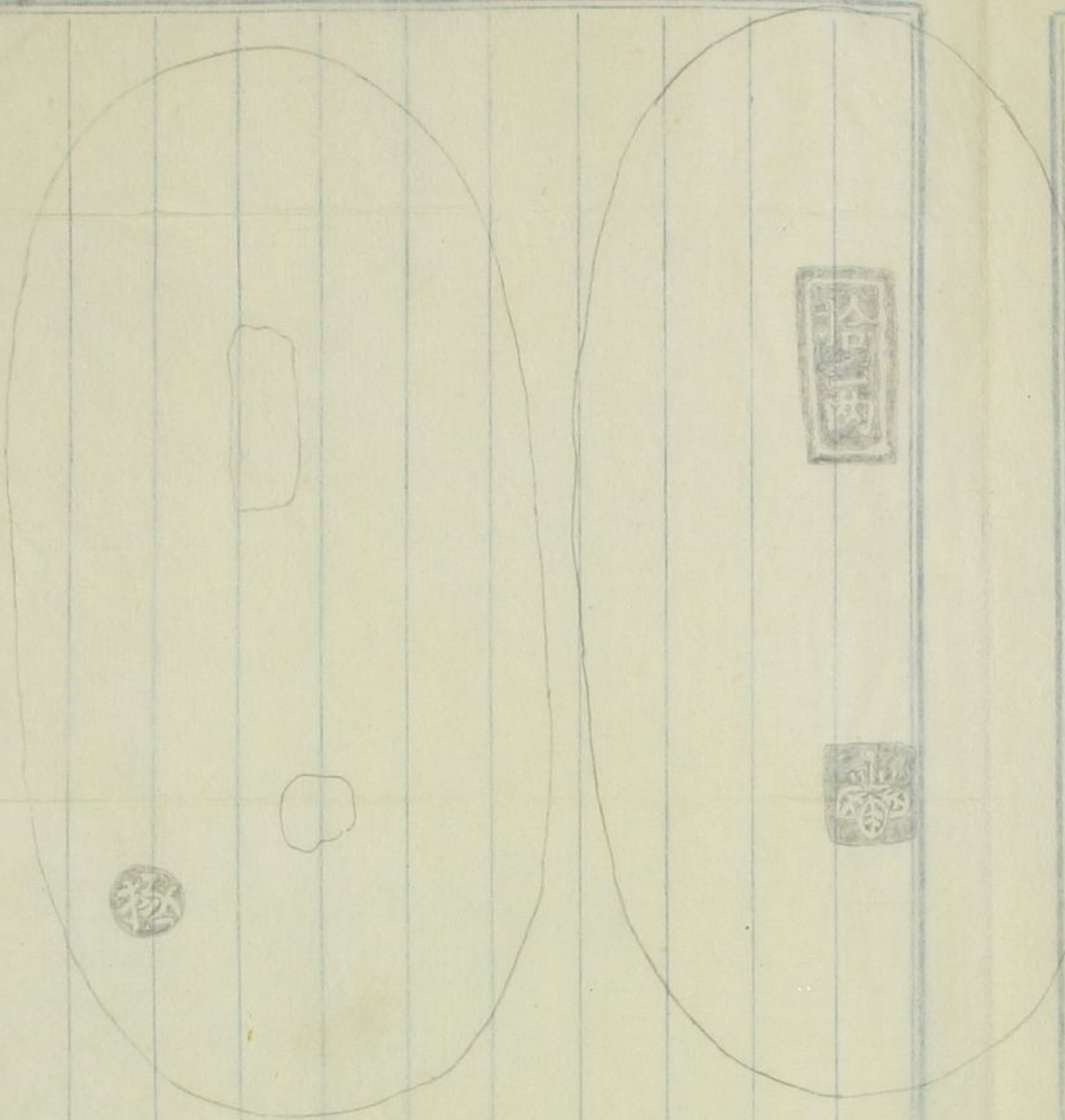
世下し程々の體験法を載せし、伝文生治「械園
車の火矢」傳書協の軌歴「新振の重師」火見
格の一時「潜み夫」炭桶たる「道以撒如」太
田突の思「甘等皆苦衆の言書来」伝文生治
校変車の「せとん」七出七の文家と「えん」たる
労働者のある「の」或んと一身を犠牲するの境
にあること、又「うらうら」器「入」体験せざる「知
りかたき」そのある、労働者に「回」を「高」めんとす
る「うへ」その實状を知り「の」名用あり、管を家為政
家多く「の」之んを「知」らざり、之んを「あ」今の者たるも
（一月三十日記）

割草屋

牡丹の余が命名する「あう」修儀守「らう」
が「エ事」中「何ん」も「地」の「南」なるか、未だ「未」し
少く「及」ひ「さる」か、小判を「あう」なるか、未だ「未」し
テ「う」を「仕切判」と小判形「う」たりしこと、余
又「亭」名の「拙」直毛を「話」ひ「来」る、又「千紙」の「由」
地「り」出「し」たる「小判」を「傳」し「る」一「絶」を「添」く「未」の、
小判の「あう」別「許」あるか、何ん「う」ても「元」主「い」
幸「軍」の「い」の「也」此「家」一「二」代「来」成「切」市「家」の「位
に」ある「も」て「延」並を「換」いて「買」い「入」る「も」の「金」瓶を
地「り」出「し」たる「金」に「延」並「う」し、其「地」物の「傳」り「来」
る「も」て「萬」圓の「買」入「値」あり「或」ハ「四」ハ「と」る「も」ん（一月
三十日記）

面

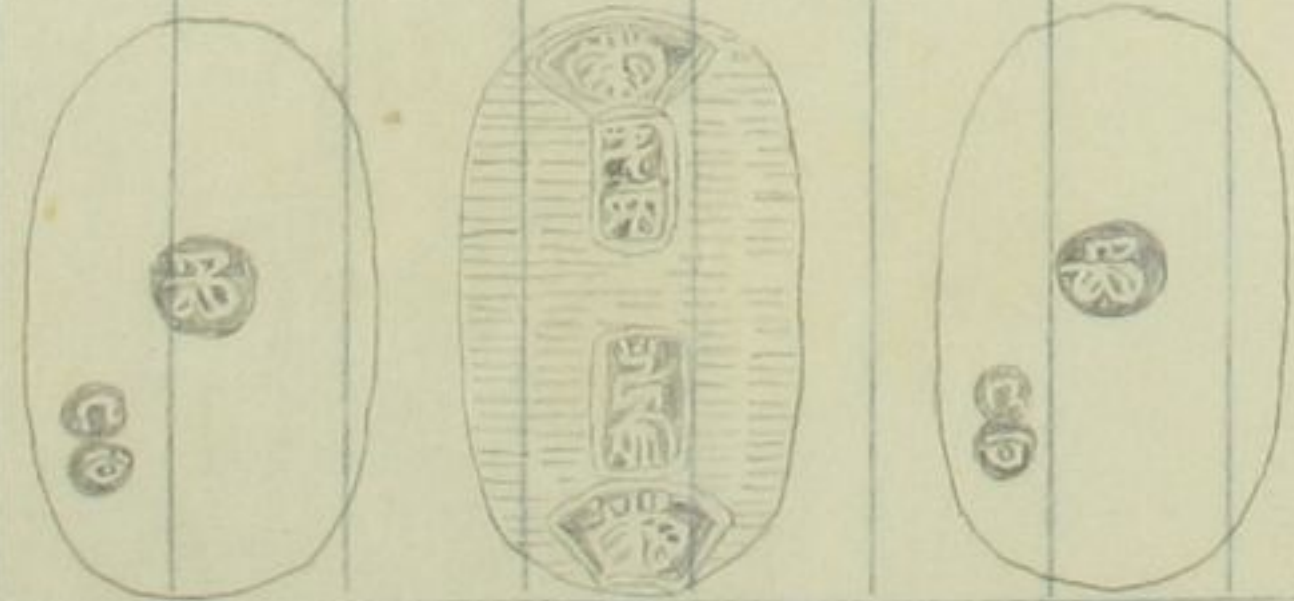
背



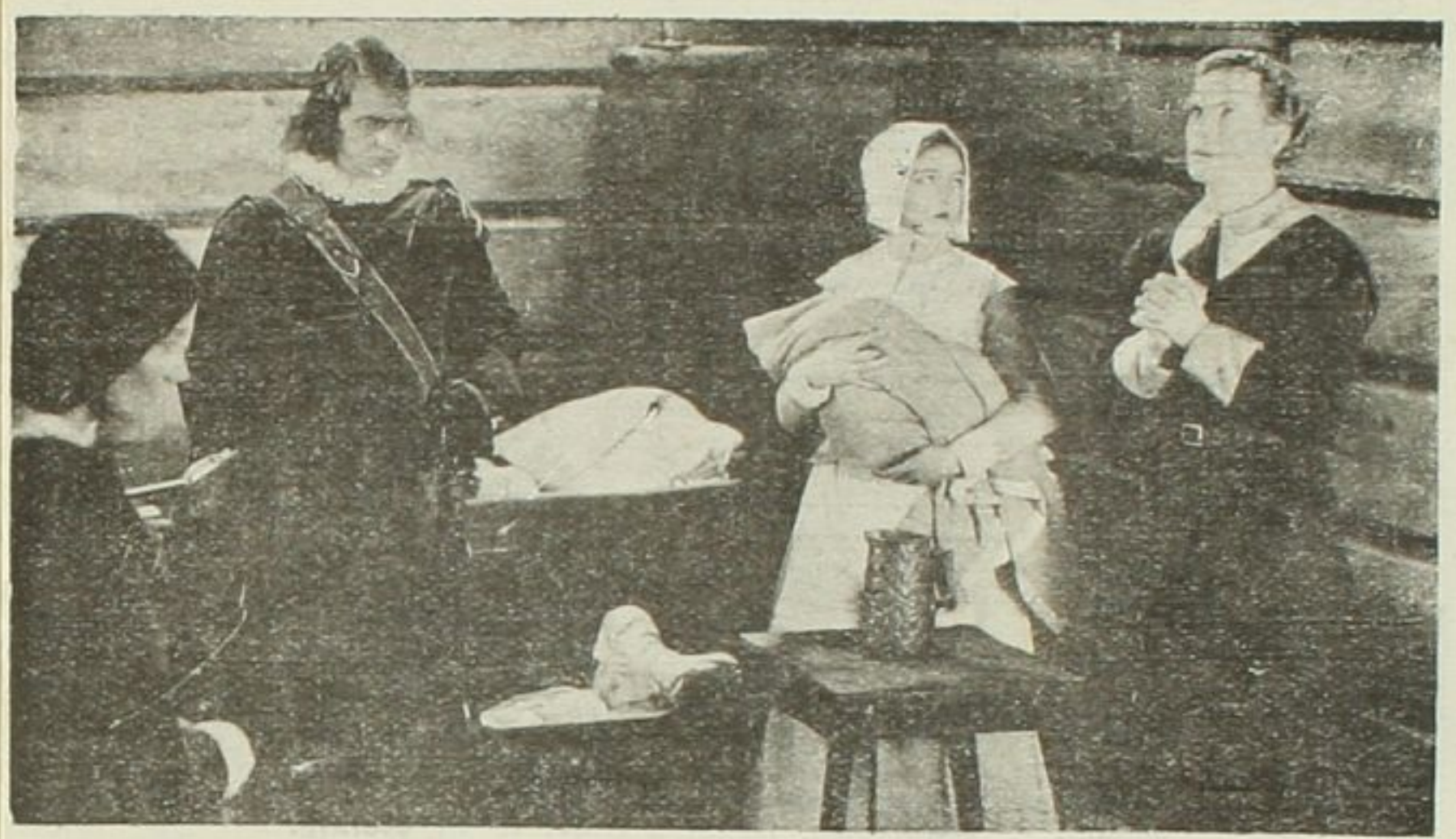
新小判金

面

背



○例のことく、彼に付いて武蔵野の映書しを又
 おちろろく思ふたる真紅の文字の映書しを
 とあつた、これとホーソルンの有名な小説を概
 々あつた、Scarlet Letter が此の小説の骨子
 である、赤毛で女子の胸の胸の胸の胸の
 Aの字をもち、宗家の宗家のAとあり
 adulteress 此の首をもち、清輝教徒と
 斯の制裁を設けて婦人の節操を取締つた、
 ある、徹頭徹尾の宗家の宗家の宗家の宗家の
 間、男女の情交を断絶し、有夫の婦人が宣取
 りと志、後、終つて一子と奉り、つたが、婦



真紅の文字

全九卷

メトロゴールドウイン社映画
 文豪ホーソン原作 フランシス・マリオン女史脚色
 ヴィクトル・シエストレム氏監督

ヘスター リリアン・ギッシュ嬢
 ティムズデル師 ライス・ハンソン氏
 グリン ヘンリー・ウォルツール氏
 ガイルス カール・トゥッカー氏
 市長 ウィリアム・トウカー氏
 パール ジョイス・コード嬢
 ヒレンス マルセル・コルデー嬢

略筋——清教徒的精神が極端に勢力のあつた十七世紀の中頃ニュウ
 イングランドの或る部落に起つた悲劇である。
 裁縫師のヘスターは美しく若く快活だつたが安息日に断け廻つたと
 言ふ罪で教會に於いてティムズデル師に譴責され罰せられた。然
 し此の事から温情の牧師とヘスターとの戀は芽生えて行つた。そ
 て敬愛されて居る若い牧師と常に村人から輕侮されて居る裁縫師と
 の熱烈な戀は遂に行きつく所まで行つたのだつた。其の後牧師が布
 教の爲に暫く村を去つた間にヘスターは二人の愛の結晶を生み落し
 た。牧師が歸つて來た時、ヘスターは曝し台に掛けられて衣に毒通
 の頭文字Aを縫ひつけられた。彼女は牧師の名譽のため、牧師の言
 を却けて男の名を言はなかつた。其の後ヘスターの以前の夫が突然
 姿を現し、今は成長したパールを父は牧師であることを知り、二人
 に苦痛を與へることに残忍な悦びを感じたのだつた。二人は遂に村
 か逃げ歸り、決心した牧師はヘスターの胸からAをはさしたが無邪氣な
 パールは母の胸にあるべきものと思つてゐたので之を肯んじなかつ
 た。之に動かされた牧師は總べてを村人に告白し、已に胸の肉に烙印
 したAを示しヘスターの胸に抱かれて曝し台の上で死んで行つた。

説明 石野馬城 徳川夢聲 伴奏曲目選定 貫洞喜代治

人の喜劇に愛を込めて描く婦人の名を秘し、情夫を
 教へて一と娘の心は堪へず、死んで
 の婦人の良人が現れ出て、他人との間に子まは
 けることもあらずして、その手は復讐を
 立先よる人びとに宣ふ、その良心の苛ま
 ず、又つから刑罰せらるる上つて悔悔を
 りん、情婦もまたその自白を妨げんし
 りんを及ばずして、他人の終に困倒し、
 抱いたる情婦の態を、その神を、こま
 ひ、恥辱を一身に受けんとす精神、
 の群に深き感動を興つた、その大作の
 師也

民衆歌人磯丸

名倉聞一

東海道線を西へ向うと、静岡、濱松を過ぎて豊橋へかゝる。あれから南西へ腕の如く十餘里ニユウと海中へつき出てるのが三河國渥美郡である。伊良湖崎はその突端で、遠くは伊勢、近くは尾張知多郡の鼻と相對してゐる。遠く萬葉の昔から歌の名所であつて、俳聖芭蕉の

鷹一つ見つけてうれし伊良湖崎
と云ふのが有名である。磯丸はこの伊良湖と云ふ漁村に生れた。時は明和元年五月三日である。

死んだのは嘉永元年五月三日八十五歳であつたと云ふから、大體越後の大恩良寛と時代を同じくしてゐる。天明寛政と文化文政とにわたつた人である。また同郡田原藩の家老渡邊華山も同時代の人である。

磯丸姓は糟谷名は新之丞と云つたが、後に半之丞と改めた。もとから家は貧乏で半漁半農であつたやうである。父には幼い時にわかれ、只母のあつたが、これが病身で廿年も病の床

「もし〜。御隠居、いまあなたのおよみなさつたものは何だね、一體そこに何が書いてあるかね」

旅人は裸で髪を切つた乞食のやうに手足のきたない漁師の若者を見ると笑ひ出した。

「ハ……。コレ若い衆。いまおれの口づさむだのは歌と云ふものだ。歌と云つてもお前がたが唄ふ船歌や野良歌では



磯丸像

ない。三十一文字、敷島の道と云つてな」

「それは御隠居さん。むづかしいもんかね」

「さあ、別にむづかしいと云ふわけではない。無學だとして作れないと云ふわけではないが」

とそれから、この旅人は磯丸に和歌三十一文字のならべ方を教

についてゐた。孝心深い磯丸は髪をきり、水コリをとつて、伊良湖明神へ日参をした。裸詣りであつたと云ふことであるが、この裸詣りの日参が續くこと三ヶ年、祈願の甲斐があつて母の病は次第に全快するに至つた。

磯丸と關係の深い伊良湖明神と云ふのは伊良湖の山の上にあつて、その石段は甚だ高く、祭はなかく、賑ふのである。この邊は伊勢と船路の交通が便利である爲に、伊勢大神宮の神領たる神戸や御厨が多く、伊良湖明神も昔から神領の民が崇めた由緒の甚だ古い社である。景色も甚だいい所であつたが、今は陸軍の試砲場となり、伊良湖明神も村落も昔よりは十數町も東に移され、磯丸の墓もまた元の場所から移されてしまつた。

磯丸が母の病氣平癒を明神へ祈る爲に日参をつゞけてゐると、或る日明神の繪馬堂にかゝつた額を小聲を讀んで感心してゐる旅人がある。歌の宗匠か、武家の隠居か、何にしても先を急ぐ人ではないらしい。

へた。そして試に一つ歌を作つて見よ、何でも見たまひ、聞いたまひ、思つたまひでよいのだと云つた。

明神の石の斜段で眺むれば

沖で漁師が船をこぎます

隠居はこれ聞いて笑つた。「こぎます」はいけない。「こぐなり」とか「こぐかな」とか歌言葉を用ゐなければならぬと教へたが、何しろ珍らしい若者だと、師匠をとつて手習をしなければならぬなど教へて別れて行つた。

これが磯丸の和歌をよむ最初であつて、それから澤山の歌をよんだのであるけれども、最初は無筆の文盲であつたから、自分の歌を他人に代筆してもらつたものである。そのうち段々字を覚えて、三十六歳の頃にはやつと和歌に必要な假名がかけられるやうになり、またかなくぎ流に日記なども書けるやうになつたのであるから、この無筆時代の至純無垢の歌は多く散逸してしまつて残つてゐない。これが皆残つてゐたらさぞ面白いものであらうけれども、誠に残念である。只一首彼が隣村なる日出（ヒイ）村の齋藤家に雇はれて草薙をした時よんだと云ふ歌が残つてゐる。

朝草にかりこめられしきりぎりす

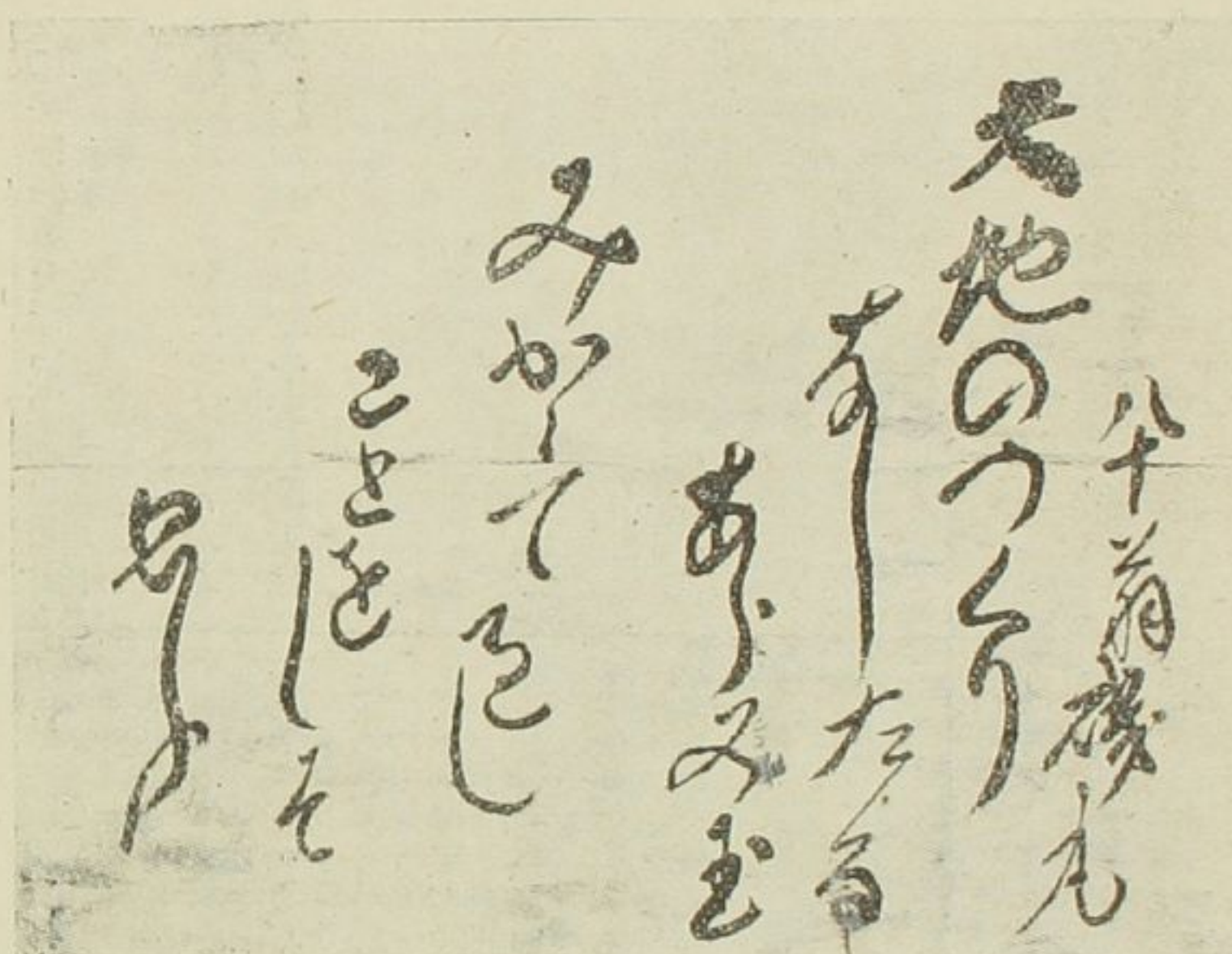
われもなくかやおれもなくなり

とそれから、この旅人は磯丸に和歌三十一文字のならべ方を教

この歌は後になつて磯丸の名聲が郷土に高くなり、その神佛を詠じた歌、心學風の歌と共に僧侶達がよく説教に引用したものである。

の宗匠として名高かつた京都の公家芝山持豊の門人であつた。持豊は文化十二年に死に権大納言正二位である。この織部が磯丸のことを聞き、伊良湖を訪ねてから、

磯丸に文字を教へ、正式に歌の教育をほどこした人は伊良湖に近い龜山村に住むだ井本彦馬常蔭と云ふ侍である。この人は美濃國揖斐郡野村藩主戸田氏有の家來であつた。當時伊勢には本居宣長が出て、國學勃興の時代であつた。彦馬はその弟子であり、この地方の國學者であつた。漁師の磯丸が無筆文盲であり乍ら歌をよくよむと云ふので、彦馬はその歌才に感じて、磯丸と云ふ名を與へた。磯丸が海岸の砂に字を書いて習つたと云ふ假名の手本などは恐らく、この彦馬が與へたのであらう。



丸のこを聞き、伊良湖を訪ねてから、
丸は親しく往復するやうになり、織部の
の中介で芝山権大納言は磯丸のあること
を知つた。それで、それは珍らしい男だ
から、つれて京都へ遊びに來い、参りま
しやうと云ふことになつた。それは磯丸
が三十九歳の頃である。
丸 織部につれられて芝山権大納言の前に
出ると、権大納言は非常に打とけた様子
で
「遠路よく参つた。其方歌道執心のよ
し、織部から聞いてゐる。今後門下
にして取らせるぞ。それには先づ名
乗をつけてつかはず」
ハテ何としたらと権大納言はしばし打案
じてゐたが、門人帳を取寄せて「貞良」

この頃吉田即ち今の豊橋に林織部と云ふ人があり、當時歌道

と記入し、それを磯丸の方へ見せた。磯丸はバツタのやうに頭
をさけた。

その時「寄道祝」と云ふ題で歌をよみ答へとのことであつた
から、磯丸は早速

しき島の道一筋のみしめなは
心にかけていのる神垣

と詠進した。権大納言は非常に満足で、盃を賜はり、結構な御
料理を頂戴して、二人大に面目をほどこして宿へかへつた。

其後度々磯丸は京都へ旅をし、芝山家へ伺候したが、ますく
権大納言の氣に入り、可愛がられて、或る年は丁度新嘗祭であ
つたので、芝山権大納言は磯丸に新嘗祭の光景を拜ましてやら
うと云つて、磯丸の爲に心配して呉れた。勿論表向でなくコッ
ソリとである。

祭の當日磯丸は雑掌三木内膳、青木中務の取持で、中務の宅
で烏帽子、狩衣をつけ、猿の衣冠つけたやうな格好で、日の御
門から参入した。付添つて行つた雑掌は中程の御門で留まり、
それから内は芝山権大納言が頼んで置いた堂上人が、これへこ
れへと招ぐので、向つて右の階から紫宸殿へ上つたが、高御座
の御側であるので、ひたすら恐懼して、伊良湖明神を心の中で
念じてゐた。

庭では行事が始まつた。庭火の神々しい有様を拜して、磯丸
はフトこれは夢ではないかと思つた。よつてお祭の神の葉が一

枚落ちてゐたのを懐に入れて下つたが、夢ではなくて其の神の
葉は後までも消えずに磯丸の守袋の中にあつた。私の聞いた一
説には、夢ではないかと磯丸は、右近の櫻と左近の橘が生えて
ゐる、その左近の橘の葉を一枚とつて歸つたと云ふのである
が、これは前説の方がよささうである。
これはばかりでなく、磯丸はその後芝山家から恩賜のお菓子を
わけて貰つたこともあるので、斯の如きことは磯丸風情が生れ
變つても叶はぬ光榮である、これも一重に伊良湖明神の御加護
のいたすところと、いよく怠慢なく伊良湖明神に朝夕参拜し、
毎夜御神燈を献上することを自分のつとめとしてゐた。彼は生
活の爲に魚をとり、網をすき、少し許りの田畑を耕して細かい
ぶせき塵をたてゐた。

そこへ時々江戸への往復に京都の公家が立寄つたり、諸國行
脚の歌人國學者が訪ねて來たりするので、村民は驚き、且つこ
れを名譽として、これほどの磯丸をすて、置くのは村の耻であ
ると、磯丸を押しして庄屋にしやうと議したこともあつた。併し
磯丸はそれを極力ことわつて、客のある時の用意に小さい座敷
を村で作つてやらうと云ふ好意だけを受けた。來訪の客につい
ては大珍談がある。
或る年の冬、有栖川宮の御三男が伊良湖の磯丸宅へ御成りと

庭では行事が始まつた。庭火の神々しい有様を拜して、磯丸
はフトこれは夢ではないかと思つた。よつてお祭の神の葉が一

庭では行事が始まつた。庭火の神々しい有様を拜して、磯丸
はフトこれは夢ではないかと思つた。よつてお祭の神の葉が一

云ふ前觸があつたので、村役人は地境まで御出迎をして、磯丸の宅へ御案内申上げた。丁度この時磯丸は所用で隣村まで行つてゐたが、かくと迎の人から聞いて、大急ぎで立歸り、珍客の御機嫌を伺つたところが「我は有栖川宮三男友光と申すもので、諸國歌修行の序に立寄つたのであるが、微行であるから家來はつれて來ない」と云ふことであつた。磯丸は喜んで出來る限りもてなした。寒い時節であつたのに薄着でお氣の毒であつたから、芝山家から拜領した黒羽二重の羽織を奉り、床にあつた陶器の瓢箪を御所望によつて献上した。

四五日御逗留になつて、御出發の際飽と金百疋の餞別を差上げたところ、金は磯丸の家内へ下された。また磯丸の詠草小本三十冊を吉田着の上で寫したいからとの御依頼があつたので、磯丸は吉田まで御見送かたがた持参し、御用濟の上いたゞいて歸つた。

これがどうであらう。有栖川宮御三男とは眞赤ないつはりで、實は兇狀持の盜賊であつたので、吉田藩で捕へ犯行の關係上大阪町奉行へ送つた。そして取調べて見ると賊が普通のものではない羽織を着てゐる。出所を訊すとこれは伊良湖の磯丸から貰つたと答へたので、その磯丸こそ當時京都大阪、わけても宮家などを荒す賊の張本人に相違ないと、早速代官所へ磯丸の護

人の娘を妻に迎へた。最初は夫婦なかもよく、磯丸は歌の旅先でも家に残した妻のことを思つて

この秋はさびしがるらむおみなへし

あれたる野邊にひとりたてれば

など讀み送つた程であつたが、妻の方はそれほどに磯丸に對する愛はなかつたのか、彼が歌の旅に家をあげ、且つ歌人として世事にもうといのを物足らなく思つて、終に不倫の行をなすやうになつた。最初磯丸は見ても見ぬふりをしてゐたが、妻の心はますます狂つて遂に破戒僧の許へ行く爲に、磯丸に離別をもとめた。

磯丸はそれを許したばかりでなく、自から妻の荷物を背負つて送つて行つた。村の人々は笑ひ嘲つた。その時磯丸がよむで女に與へたと云ふ歌。

かりそめの草の枕の露ばかり

かけしなさけも今はうらめし

うらみじな逢ふも別れもかりそめの

草の枕のゆめとおもへば

すむ水の深きなさけもくみしらで

よそによりゆくなみのあはれさ

白浪のかけし袂はぬぎすて、

送方を依頼して來た。

うそのやうな話だが、磯丸は赤阪代官所へ出頭を命ぜられ、村方役人市右衛門と今一人附添で大阪へ送られた。村の衆や附添のものが心配するにも關らず、磯丸は京見物にでも行くやうに一向半氣であつたと云ふことだ。

大阪町奉行の取調をうけた磯丸は、空とほけたり、からかつたりするので、奉行ももてあぐんだ。最後に栲問にかけやうとすると、磯丸はやつと口を切つて「羽織に就ては京都の芝山權大納言に聞けばわかる」と白狀した。最初は役人も磯丸が發狂したのではないかと思つたが、念の爲め京都所司代を経て芝山家に照會して見ると、一切の眞相が判明した。

驚いたのは大阪町奉行で、早速磯丸を釋放した上御馳走と稱して一行三人の吸物椀や壺に小判を入れて振舞つた。磯丸はこの賄賂を皆に納めさせて、京都の芝山家に立寄り、東海道を悠々と、その金をまき散らし乍ら伊良湖へ歸つた。家に歸つたときは三人とも無一物であつたと云ふ。

さて磯丸は四十過まで無妻であつた。これは老母の孝養にさしつかへると云ふ爲であつたのであるが、老母の病氣も伊良湖明神の神徳によつて、全快し、且つ老母も八十歳を越えたので、彼の女を安心させる爲に、近村赤羽根村中組の茂平と云ふ

うらなくかへん海士のさころも

我袖にかけしはきのふ今日にははや

よそのみぎはにさくは白浪

また「磯の玉藻」の戀の部にある

うらみればおなじうき世の戀衣

おもてばかりはすみそめにして

つまにだにいとほるゝまで年をへて

何をたよりに今日をくらさん

と云ふのも妻の不倫から生れた歌であらう。兎に角磯丸は不義の妻に對して寛大で、村の者がその女を「村八分」にしやうとしたのを、磯丸は頼み廻つて許してやつてゐる。これを磯丸をほめる人達は彼の佛のやうなまた聖人のやうな純な性格のあらはれであるとしてゐるが、それ或は然らん。さるにても自分は磯丸がなめたこの大なる人間苦から、澤山な深酷なうめきを聞き得なかつたことを甚だ遺憾に思ふ、

磯丸はこれ以後めとらなかつたやうである。併し八十五歳で死ぬまで女性とは没交渉であつたかと云ふと、どうもさうではなかつたやうである。彼の戀歌の中には題詠で全然空想的なものが澤山あるには相違ないが、中には血の通ふてゐるものもあるやうである。磯丸の戀が如何やうのものであつたか、芭蕉や良

さめても同じ夢の世の中
水のごとすむも濁るも世の中は
そのみなかみの心なりけり
手にとれず目に見えねど天地を

動かすものは心なりけり
あふき見るわが心まで大空に

みちこそはたれもら月の影

磯丸の名はこれまで全然中央に知られてゐるのではない。
大日本人名辭書には短けれども傳が出てゐる。磯丸が幼時砂
上で手習したことなどは天野維彦氏が放送されたことがある。
また名を逸したが劇の雜誌に「或る日の磯丸」と云ふやうなの

があつたと思ふ。愛知縣渥美郡教育會で刊行した「磯丸全集」
には文化十四年以後の歌がほとんど全部のつてゐて、磯丸研究
には缺くべからざるものである。この全集についてゐる磯丸の
傳記及び渥美郡誌につてゐる傳記は、共に磯丸が四十歳頃大
崎村の中島氏の間で自傳を物語つたのを書きとめた「は
ま千鳥」によつたもの、やうであるが、自分はまた見ない。こ
の紹介は主として「磯丸全集」によつた。
磯丸を無暗に聖人だの哲人だの歌聖だのとほめるのは議論の
あるところで、また一方彼の歌は氣品に乏しく俗であるといけな
す評にも賛成しかねる。却つて其俗なる點が民衆歌人として磯
丸の眞價ではなからうか。

(丁)

○磯丸のや侍の早稲の文をよみ載やんあるのむ
一後あがの息を感しに私に磯丸のことと解
れに初めは往年本居流の経丹る扱はあり
を手又入んれことかあるに此の磯丸に漁夫に
和歌か出も不れといふの珍らしき年々
ふれ其後偶れ磯丸の肖像一幅を得れ
るんハハ好か持ち侍り此の公巻あま
磯丸の扱と署しとある、昔侍の風来ハ
粗吟ハハ何れも漁夫ハハい相顔ハハ
れハハ自來ハハ和歌ハハあつた此の
切り扱もハハ宮上ハハ出ハハあつたハハ

自谷不きおの国と似てゐる。私一の夜に觸
ルのいん丈のことかあつて、その事蹟を
述べたことも無つた。此の切抜は知つた
實。

磯山、棚後の良寛とい時代が三河
四渚美郡伊良湖の道村に生れ、
糟谷を名を新之丞といふ。無節
の此の逸夫が歌く志しに動機に或る
以海の旅客か和歌を口吟人といふ
乙吾の古と做つたのか、羊あくの如くある
後、本居の門人井本彦馬が著し、
ふかめとちつて歌を教く文字を著し

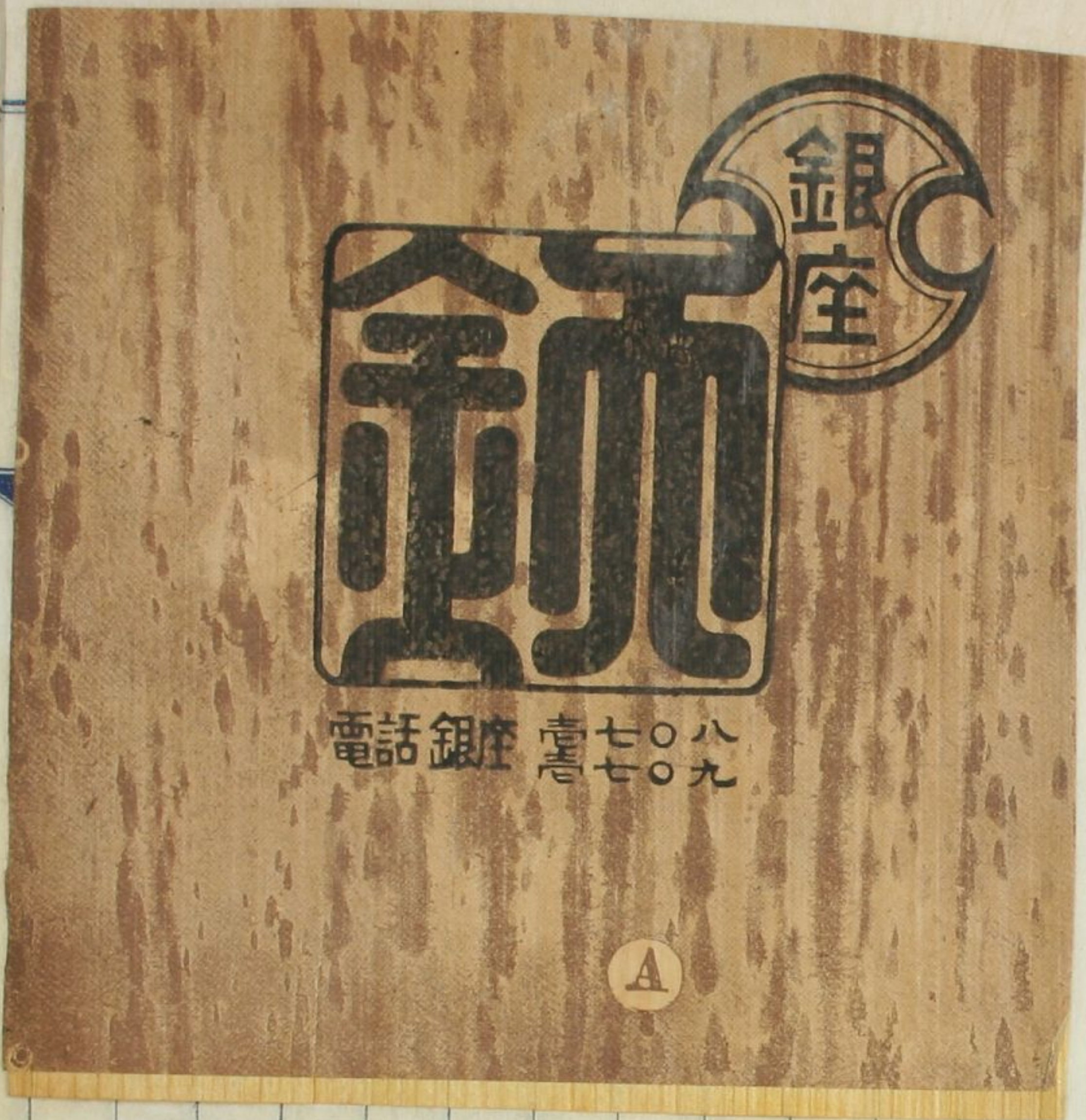
とまむ指南とて、磯山の名を述つたと
ある。逸夫が和歌に志すといふ珍らしい
いと其山橋大納言といふ其のつ下
とちつ、追て其の名かきつて、歌人が
面白むかす家を訪ひ来るやうな事
つた。ある時、お物の古の三男と詐稱
して来たといふ。たまきんといふ女、妻
か或る傍に居り、離縁の時、其の
のあつたをみりから捨て、人といふ
心人の笑を誘はれたこと、あつて、
夫の性格をあらわし、無節の逸
夫、後、お南の歌人といふことを

思ふと志といふは悔らぬよひである

(九月二日記)

○この日のさうあるき日本橋までおはすまじ、
電車に乗つた。田タリに乗つた。余は上層
見のこのまゝおとらるゝもの無、但れモガ
とモボの朝子とて構へつゝあるが目こつゝ、電車
中へ三十分たつた。一婦人が二児を母抱か
たつのが目こつた。一児は乳を啣んでおろし一児
は肩より負はれてゐる。兄は二児も生んで十
ヶ月位を仕た。四位とある。双生児があることが
知んた。買つてゐる一児が、おつた。おつた。おつた。

のまゝ乳を吐つた。あゝ乳は二児が羨む。ブラサガ
つてある。光景も又とめ。あゝ乳は二児が羨む。ブラサガ
あゝ乳の左右にある。あゝ乳は二児が羨む。ブラサガ
ひあるとも思はれた。白木屋の横町で感したの
中華亭下かい。白木屋の所へ。さうして
このことある。北割屋。白木屋の
か。さうして張り抜いて今日と。其出地も
さうして。あゝ乳は二児が羨む。ブラサガ
のほおひ。あゝ乳は二児が羨む。ブラサガ
ひも去却せ。さうして。白木屋の横町の
あゝ乳は二児が羨む。ブラサガ
て。



十二行

皮とといふと、天金の極印のあつたものをいふ。こ
 れは乳葉のまらうたが、よく見ると、こんを摸造
 牛皮が、其の製法も、家を一隅とあらうして
 ある。紙葉が木葉の折れ代り、世の中
 あるから、摸造(牛皮の行り)もある。儀へ
 が外面の斑から、千しから、実物をつくり
 して、口油の葉が、二じやうやうあることか
 らる。こ
 こは其の断片をおとすおとす (九月五日)

十二行



讀書ペチ

「道筆春城六種」

を讀みて

魚

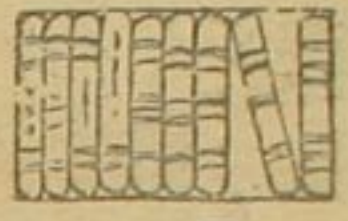
川生

今少しく踏こんで小介するならば、
 激人亡命客敵海、馳有島と會談し
 た時、著者が敵海をわが國の新井
 白石に比し、その學識の豊なる點
 において、文藝に富める點におい
 て、早く西洋の事情に通じたる點
 において、創見があつて、誤謬の
 多い舊説を改竄し新見地を開拓し
 たる點において、態度に剛直して、
 新學を唱へたる點において、權
 門の重名を得たる點において、兩
 者如何にも似通ふたところがある
 と形似したるに對して、筆中の一
 人が、只一つ大に相違してゐるも
 のがある、として白石は名代の賢
 人であつたが南海は、富饒に當
 つて大金を儲け巨萬の富を有して
 る、こゝが違ふと言出したとい
 ふ、南海と富饒、只この一點に深
 い興味を持たせられ、またこれも
 朝鮮からの名客であつた林漢孝
 と、大森探梅の歸りに新橋附近の
 怪けなる洋食店で痛飲、主客とも
 に酩酊の境に入つたといふ話など
 も、興味のある追憶談だと讀んだ
 が前原一誠と、奥平鐵輔の話にな
 ると一段と感興を引くものがある

たのもことであり、その後原が置
 かれたのもことであつて前原は、
 越後府の長官としてしばらく水原
 に来てゐた。水原には舊陣屋もあ
 つたが設備が不充分だとなつて著
 者の家に宿泊してゐたものだ。な
 んでも邸内に醫者があつて、それ
 が母屋と離れてゐてかなり遠かつ
 たのでそこを前原の居室と定めて
 ゐたのである。當時の著者は
 まだ頑固な子弟であつた時には
 前原の居室で遊び戯れ、菓子な
 どをもらつて喜び毎日遊びに行か
 れば気がすまぬやうになり、前原
 の方でも可愛がつてくれたとある
 著者の見た前原は、極めて體かな
 げな人で、醜態には薄おぼた
 があり、色白であつたといふであ
 る。如何にも鷹揚で、物に感服せ
 ず、どつちかといふと朝野坊で、
 そして無性で、毎月府から受取る
 長官の俸給なども軍書紙に包んだ
 まゝ、それが何ヶ月分もはふり放
 しにして置くといふ有様であつた
 と。その頃前原に使はれてゐたも
 のに伊藤退蔵と、遠藤七郎との二
 人があつた。伊藤はその頃水原で
 蠟燭の製造を業としてゐたもので
 あつたが晩年岩船郡長になつた。
 大森探梅として相當地位を占め
 た伊藤退蔵は、實は退蔵の養子で
 ある。それから前原には一人の妾
 のあつた事から一日、一癖ある癖

刀の一士人が袴も、袴袖も着けず
 に前原をるか、とはかりつか／＼
 入りこんで門番を蹴飛ばしたそれ
 が奥平鐵輔であつた事や、奥平は
 鐵面漆の如く黒く、兩眼は鷹々と
 光つてをり、疎末なる衣服を纏ふ
 てそれでも白縮緬の兵兒帯をしめ
 足袋もはかず、古びた下駄を突つ
 かけてゐたもので、前原と會つて
 も只オーといつたばかりで、それ
 からは破綻の如き大體ではなしつ
 づける。この時の奥平は佐渡の准
 知事として赴任の途次前原を尋ね
 て來たもので、何日ほど滞留した
 かは著者にも記憶がないとの事だ
 あるが奥平は、前原の鷹揚で、寡
 言であるのに對して如何にも性急
 で、多感であり、前原は有名の朝
 野坊であるのに奥平は東方の白鳥
 前に早く目を覺まして彼の破綻の
 如き態で詩を吟じ、書を讀む、前
 原は喜怒哀樂色にはあらず、一
 守備固の出来なるところがあるに
 奥平は驚愕、ともすれば劍を
 舞はせ目についで、また前原は、
 舞はせ目に飲んで泥酔の境に至ら
 ないのに奥平の方は半醒なほ辭せ
 ず、玉山鏗る、時はかん巖雷の如
 く、どう見ても武勇の人で渾身こ
 れ、世を知らず退くを知らぬ
 いは、無鐵砲の方であるもこの人
 學殖深く、詩書ともにあの頃の有
 志家の群を抜き、文章はかつて草
 稿をつくらず立どころに成つた、
 といふやうな事からさらに奥平に
 四斗樽を興へて岩船の片田舎、辰
 田といふところをやつた事や、前
 原とは後年東京で逢ふたが奥平と
 は、越後で別れたのが永訣であつ
 た、など面白く書かれてある。

てゐるので、それを慰撫するの意
 から紅葉を、高田半峰博士小石川
 の邸に招いた事がある。この日會
 したものは、藤田博士に、著者、それ
 に坪内老圃士、鹿田竹翁、長田秋濤
 龍田平古、武内相舟等であつたが
 紅葉は、この頃病氣が多少進んで
 ゐたといふのに、衰齒の容子は見
 へたがすこぶる元氣なものであつ
 た、俳人二人、畫家二人來り合して
 ゐる會であるから自然所畫が餘興
 として始まる。紅葉の畫は總筆に
 近いものだ、と思ふと驚然たらざ
 るを得ないものがあつた、とも書
 いてゐる。そこで紅葉先づ筆を揮
 つて短冊、色紙、縋本と手あたり
 次第に得意の句を録する。その句
 の中に辭世らしいものもあつて織
 壁に涙を催ふさせたともある。こ
 の時紅葉が著者の畫帳に書いた句
 に、「目を閉じて嗚呼 われ花につ
 かれけり」といふのがあり、さう
 が眞迪の紅葉もこの時は既に、大
 好物のうなぎや、天ぷらに手を出
 す事が出来ず、致しげに嘆息する
 状を見ては氣の毒の感に打たれて
 胸一杯となつたともあり、それで
 も紅葉は體ものと、うなぎが喰つ
 てみたいとかこち、著者は調理し
 た物菜、半條は油揚げ、榎舟は筍子、
 竹涼はうるかを主張、證美した事
 ままでが悲痛のうちにも、面白、お
 かしく書かれてある。



讀書ペチ

「隨筆春城六種」

を讀みて (三)

魚川生

一ツ橋の帝大に學んだ同窓者の横

るものがある。

再會、奇遇の一項である。

京傳が始め動かれた時は「北越雪譜」と名づけ、繪入りの讀み本とする積りであつたらしく、馬琴の手へ移つてからは「北越雪譜」の名が擱かれ、さらに京山が引ける事となつてからは「越後國雪譜」に附せられてもみたが本屋の要目もあつて「北越雪譜」に決した。京山も「北越雪譜」の題名をよし、としたのである。この頃の文藝者は自負心が強く、負けじきらひなところがあつて「北越雪譜」それは馬琴の命名したものであるからそのまゝの采擷は、京山の文藝にもかかはる、とあつて強ひて譜を、志になどちつてはみたものの、結局譜としたので、その時の京山の手紙にも、「譜も志も字意通からず志とする所以は馬琴が馳したるがいやさ故也、これは此方のまじり也、馬琴が一笑は滄海の一粟也譜とすべし」と書いてをり、馬琴に降伏するのが如何にも残念である、としてゐる化政時代における文藝者の心意なるものがハッキリと取り取られる。

「隨筆春城六種」著者の隨筆記であるだけに、この隨筆からは見のがしてはならぬ随筆、の一つであるが、その中にこんな事書かれてある。長野監獄における著者はいろ／＼のものに化けた。書も讀み師とまでなつた。著者にもなつた。或る時、著者は長野監獄に五六度手本を書いてやつた事がある、するとそれが獄内で評判となつてわれもしくと需めて来る。そこで著者も少しく書法を習つてみる氣になつたが手本がない。獄中にこんなものがあつたらはすのなないに、佐藤得所の書いた摺本の千字文を發見し、無聊にまかせて習つたとあるが、この記文を讀んで私に會得した一つのものがある。それは著者の書風の如何にも得所に似たるものがあつて、多分得所に學んだものであらうとは思つてみたもの、何れの時代、どこで習はれたかは知りもしなければ、聞いてもみなかつたのであつた。が實は著者は長野の獄中で得所を習つたのであつた。

洗ひに井戸端に出れば嬰兒をして鹽に、水を汲ませて来るし、著者がいよく出獄するとすると、遂に別會は歸いてくれるし、著者もその任侠には感じてゐるのであつたが、出獄してから後の著者は富五郎の事などは全く忘れてしまへ、十數年を送つた後、偶々大隈侯邸に進歩黨員一同が招かれて行つた時、長い事監獄をしてをった竹村良貞君が、珍しい男を紹介する、とて引合はされたのが意外にも富五郎であつた、といふ富五郎との再會、奇遇の一項である。

「隨筆春城六種」著者の隨筆記であるだけに、この隨筆からは見のがしてはならぬ随筆、の一つであるが、その中にこんな事書かれてある。長野監獄における著者はいろ／＼のものに化けた。書も讀み師とまでなつた。著者にもなつた。或る時、著者は長野監獄に五六度手本を書いてやつた事がある、するとそれが獄内で評判となつてわれもしくと需めて来る。そこで著者も少しく書法を習つてみる氣になつたが手本がない。獄中にこんなものがあつたらはすのなないに、佐藤得所の書いた摺本の千字文を發見し、無聊にまかせて習つたとあるが、この記文を讀んで私に會得した一つのものがある。それは著者の書風の如何にも得所に似たるものがあつて、多分得所に學んだものであらうとは思つてみたもの、何れの時代、どこで習はれたかは知りもしなければ、聞いてもみなかつたのであつた。が實は著者は長野の獄中で得所を習つたのであつた。

獄中の出来事として今一つ轉錄すべき事がある。信州上田のものを信州切つての傳徒の輩分に早川富五郎といふのがあつた。この男も著者入獄の頃入獄してゐたもので例の手本を書いてもらひに來たので知り合になつた。この男は右の眼の下にむらさきのあざがあつて見るから一と癖のありさうの男。しかしどこまでも傳徒かたき、親分肌の男であつて著者が朝、顔を



讀書ペーヂ

「隨筆春城六種」を讀みて (四)

魚川生

京山の手記... 隨筆春城六種... 讀んで書き添つて來る...

好何にも謙虚で、そして心安く、やくかいにならうとする心状が文字の上にあふれてをり、人格といふほどでなくともその性格、品性...

の後はどうなつてゐるか、心がけてゐながらも今もつて知るところがない。

京山の手記... 隨筆春城六種... 讀んで書き添つて來る... 京山の手記...

好何にも謙虚で、そして心安く、やくかいにならうとする心状が文字の上にあふれてをり、人格といふほどでなくともその性格、品性...

の後はどうなつてゐるか、心がけてゐながらも今もつて知るところがない。



とか、日本産と心付かず、支那産の高麗だといつてゐるのは毎度の事で、骨董屋で買つた場合、あける手ひも皆それである。妙な事は、骨董屋は能くこれに反してなるべく青年にしようとす、産地についても同様で、日本固有のものとはとも角、すこしく疑はしいものになると、賣る方では斷じて支那だといふのに顧客はこれを和製だといふ、實に奇談である、といった風な、皮肉な書方をしてゐるのであるし、面白きは、

報

わな、胃を壯健にし、胃酸の分泌を旺盛にしてバクテリア感染を殺してしまへばよい。而して

これを避けつゝある人でも食慾の弱くまことに大食を饒ければ、その結果も亦知るべきである。

井原西鶴の眞蹟甚だ稀にして東都にあるもの多くは贋物なり。但だ浪華に往々眞蹟を藏するものあり、曾て水落露石の居を訪ふて俳句の短冊を觀る、句書共に佳なり、曰く

臺所科學 調味料の性質
味噌や砂糖、醬油等の科學的用法と味附
調味料は調味の醜、按と云ふことが大切で、普通我が國の調味料は醬油、鹽、酢、酒、味噌、砂糖の數種類を出ませんから之を巧みに配合するの、非科學的方法をとつて順序を逆にしたり、必要以上を入れたのでは折角の美味を作り出すことも出来ません。そこに臺所科學智識とでも云つたやうなものがどうしても必要になつて來ます。簡単に云へば調味料の性質をあらかじめ知つてゐると云ふ事になります。

砂糖や鹽 之は不揮發性調味品ですから早く煮立てて

A large table with multiple vertical columns, likely a ledger or a list of items, but the text is illegible due to the image quality and resolution.



昭和22年6月5日 報知読書案内 第8号 (第8種郵便物認可)

第一 北越書肆の発行者ともいふべき岡本牧之から、初め京傳にこの書の編纂を依頼し、次で馬琴に依頼したまゝになつて居るが、京山が引受ける以前、一應馬琴に面会して諒解を得る様との書状に對し、京山の返書には、馬琴とは奥誦の如く善信を絶ち、眼病の由も傳書によつて初めて知つたもの意味の返書を出して居る。森城氏は江戸の著作仲間で、馬琴の眼病はたれ一人知らぬ者はない位なのに京山が知らなかつたのは、隣逆の程度は分ると書いて居るが、私の考へは京山は無論知つて居たがテレカクシにこんな書面を書いて、たものと思ふ、細妹の糸巻には、馬琴が六年以前から明を失し、子の宗伯の末に人に筆記させて、善作を續けて居ると明記して居る。要するにこの當中に巻けられた馬琴の書簡中にも、多少作偽があると共に、京山の書面も、眞実味のある欠けたものがあると信ずる。なほ馬琴が初めて京傳に面会した時の模様について、京山と馬琴との記述には、大なる相違点があるが、繁健にわたるから省略する。此の外「意外録」「瀬口巻」の二篇雜代にしてエッセイ的な著者の筆致や味ふことが出来る。後者の大層活字二段組みにしたのは、紙数の都合にもよるらしいが、矢張り普通に組んで欲しかった。

矢田稱雲氏の空想

秀吉は英雄か
それは面白いものである。

以下
11丁
白紙

陳汝言溪山晴爽圖立幅



然しその記述の仕方が何であらうと圖書は間違なく蒸汽機關に關する事柄が書かれてゐるのである。そして正しい分類法の全體の目的は特殊の題目に關する圖書を一所にまとめると云ふ事であるから、それがどんな見地から書かれてあつても蒸汽機關に關する圖書を入れる場所は唯一つでなければならぬ。

圖書分類の着眼點

ある題目の圖書を分類せんとする場合に簡單なものは別として、物によつては多方面に關係する場合がある。その例として著者のあげてゐるのは碑石をあげてゐる。この碑石を金石文として美術の部に分類してしまへば問題ではないが今少し精細に分類の場所を決定し得る種々の場合を考へて見ると、

- 一、刻字の國語
- 二、刻字の主題
- 三、書體
- 四、碑石の所在地
- 五、碑石の質
- 六、石の歴史、傳説
- 七、碑石を建てた目的(地標か、記念碑か)
- 八、石の意匠

等がある。これによつても組織的な分類表を十分に使ひこなすには相當の注意を拂ふ必要あることがわかるであらう。是等の八方面中特に目立つて見える點は碑石を建てた目的のいふ一項であらう。この目的が解ればこの困難は解決さ

れる。誰が考へても碑石建設の目的はある事件又はある人物の記念の爲めである云ふことには異存はあるまい。それ故圖書を分類するに當つて最も注意すべきは多くの場合形式としての特色、表現の如きは考慮に入れないでよろしい最も注意すべきは其の主題と目的とである(形式を主とする部門は十進法に就いて言つて見れば第一門と第九門とであることは云ふまでもない)。例へば哲學的に書かれた英國歴史を Aristotle, Hume, Descartes の哲學書の一所に排列することは正しいとはいへない。繪畫の論理學(Picture Logic)と云ふ書名の圖書は美術として分類するのが普通である。

るかを決定してこれを最も適當な部門(Class)に入れなければならない。

これに反して、目録掛は其の圖書に取扱はれてゐる主要題目如何といふ様な問題に對して頭を悩ます必要はない。何となれば彼の仕事はカードに記入することであつて、圖書そのものではないからである。故に彼は一冊の圖書を自分が必要と考へるだけ多くの題目の下に分けることも、索引を附することも出来る。かくてこれを適當にカードに記入し、一定の順序に排列して研究者の便に供すればよいのである。

相關索引(Relative index)

相關索引は目録掛に取つては非常に便利である。この索引によれば當題目の別名を暗示される事もあり、時には目録者の氣づかない題目の範圍及び立場をも示される。

所がこの種の暗示は分類掛に取つては往々致命的である。分類掛はなるべく虚心に分類せんとする圖書に對せなければならぬ。それ故に相關索引によるときは關係題目が一時に目について結局判断に迷ひ、時には誤謬に陥る様な事になる。その實例をあげる事は全く不要であらう。何となれば多少でも圖書の分類をしたことのあるものは相關索引の如何なる種のものか

はあつても二三の題目はあつても一層誤り易い。

それ故入れ場所をかへた方がよい云ふ様な有力な理由が出てこない限りアルファベチカルの参照索引の方が分類表にも必要であり、最初に所屬せしむべき部門を選択して、これに嚴密に挿入する場合にも必要である。

詳細な分類表を參考せよ

如何なる粗略な分類表によつても分類しやうとすれば大體の圖書の分類は出來やう。題目によつては非常に包含的で、どの部門にでも分類される様なものもある。そんな場合に深く研究もせず鷹揚にやつてのけやうと思へば分類の

